新制

新撰女子國語讀本

四年制用

巻八

42403
教科書文庫
4
810
42-1941
20000
71953

資料室

昭和十六年二十九月日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用・實業學校國語科用

教科書文庫
4
810
42-1941
2000071953

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

新制 新撰女子國語讀本

四年制用

広島大学
教
71953
図書

46
810
昭16

初雁の御歌　　鏑木清方筆

広島大学図書
2000071953

新制

新撰女子國語讀本　卷八

目次

一　禁庭の野分　昭憲皇太后御作　一

二　維新の大業　井野邊茂雄　四

三　美術に現れたる日本國民性　藤懸靜也　一〇

四　元祿文壇の三文豪　藤井乙男　二四

五　奥の細道抄　〔奥の細道〕　三一

六 蕉風 三八
七 巡禮歌 〔傾城阿波鳴門〕 四一
八 物まなび 〔玉かつま〕 四八
九 すがのあら野 五二
一〇 中世に於ける京都の經濟 花見朔巳 五五
一一 平安京 藤岡作太郎 六〇
一二 月の都 〔竹取物語〕 六四
一三 須磨の浦波 〔源氏物語〕 七一
一四 春は曙 〔枕草子〕 七五
一五 古今と新古今 〔古今和歌集〕〔新古今和歌集〕 七九
一六 大原御幸 〔平家物語〕 八四

一七 新島守 〔增鏡〕 九三
一八 季節の興趣 〔徒然草〕 一〇二
一九 羽衣 〔謠曲〕 一〇九
二〇 國語の愛護 五十嵐力 一一五
二一 激流の宮處 〔萬葉集〕 一二一
二二 上代の農耕生活 一二七
二三 天孫降臨の神話 一三三
二四 庭燎に奉仕して 一四一
〔自修文〕
一 愚禿親鸞 金子大榮 一四四

二山路　夏目漱石　一五二
附錄
日本文學年表略

新制

新撰女子國語讀本　卷八

一　禁庭の野分

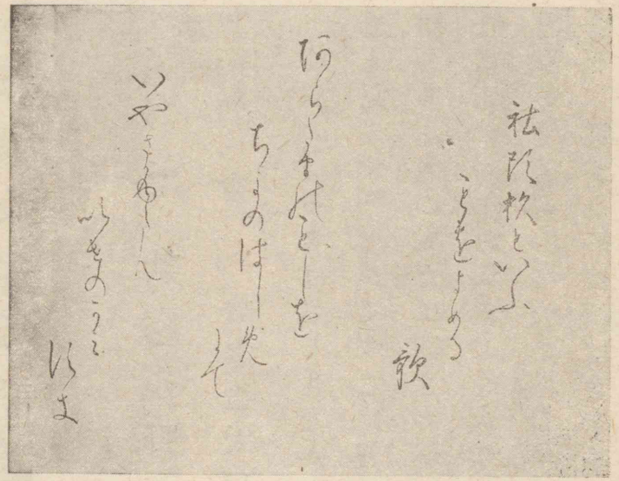
昭憲皇太后御作

朝露のひるまはさしもなかりし空の、俄かにかき曇り、夕づつの光も見えず。とかくするほどに、雨いたく降りいでて、ほとり近く語りあふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。ねやに入る頃はなほ雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、雷さへなりはたゝきて、夢現とも思ひさだむるひまなく稲妻のきらめき渡る、いとけうとし。曉がたには雨はをやみぬれど、風烈しう吹出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとゞ目も合はず。

昭憲皇太后　明治天皇の皇后。
夕づつ　夕方西方の空に見ゆる金星をいふ。宵の明星。
なりはたゝく
けうとし

上　明治天皇。
遠き境に云々　明治天皇、明治十四年に北海道及び東北地方に御巡幸し給ふ。
皇太后　英照皇太后。
社頭杉といふことをよめる歌　あらたまのことしをちよのはしめにていやさかゆらんいせのかみすき

上には、民のためとて、畏くも遠き境に出でましたるほどなれば、いかなる行宮にましまして、この風の音に御心を惱ましたまふらん。皇太后の宮には、いかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きやしたまふらんと思ひつゞくるほどに、夜も明けぬれど、いまだ風靜まらで、いづこもおろしこめたる、いと物むづかし。軒近き栗の枝の、結べる實ながら吹き折らるゝ音いと烈しく、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折伏しぬ。今を盛りと見えし眞萩も、名殘なく散



昭憲皇太后御筆

すゞろ

科戸の神　級戸邊神ともいふ。風を掌る神。

亂れたる、いとさびしく見ゆ。宮の内だにかく荒れぬるを、ましてあやしげなる賤が家居などは、倒れぬるも多からんなど思ひやればすゞろに悲し。

おしなべてみのりよしと聞きつる千町田の稻も、吹きそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、

國のため科戸の神もこゝろして稻葉のうへはよきて吹かなん

なほとやかくと胸をいたむるほどに、いつとなくしづまりて、日影まばゆく雲間にさし出でぬるに、おのづから人の心もおちゐにけり。

未曾有

輻湊

貨幣經濟

端緒（タンショ。）

封建制度

二　維新の大業

江戸幕府が崩解し、明治の新政府が組織せられ、維新の別天地が展開せられたのは、誠に未曾有の一大政變であつた。

幕府衰亡王政維新の原因に就いて、詳かに之を考察する時には、政治的にも、經濟的にも、社會的にも、種々なる事情が輻湊して、それが互に原因となり結果となつて、茲に及んだものと解釋することが出來よう。即ち貨幣經濟の發達は、農業經濟を基礎とした武士階級の在存を危くすると共に、資本の力を擁する町人階級の勃興を促したことが、言ふまでもなく其の重大な原因の一つであつた。かくて政治上に於ては、武士社會衰亡の端緒を開き、經濟上に於ては、既に國民經濟の過程に入つて富の集中を促し、社會上に於ては、武士と町人との對立を見たのである。武士を中心とする封建制

出目

雙方の數量を比較したる時の差數。

彌縫

瀰漫

度が、到底永く維持すべからざるは、當然の情勢であつた。されば當年の所謂武士なるものは、孰れも窮乏に陷つて居たが、中にも特に幕府の如きは、僅かに四百萬石の世帶で、中央政府たる機能に任じなければならない狀態に置かれてゐたがために、甚しく財政の缺乏を感じ、元祿以來は支出はいつも收入よりも超過し、貨幣の改鑄による出目によつて、漸く之を彌縫するといふ有樣で、早晩破產を免れることの出來ぬ運命にあつた。

更に他の一面に於ては、學問の發達と共に、國家及び國體に關する國民の自覺が生じ、尊王の思想は油然として上下の間に瀰漫するやうになつた。公家と武家との二元的勢力の對立は、既に一部國民の承認しない所であつた。かゝる思想は年と共に進んで行くのであるから、國民思想の上から見ても、幕府の基礎は動搖せざるを得ない。

時の問題

萌芽 バウガ。

以上述べたやうに、貨幣經濟の發達は社會組織の變革を促し、尊王思想の發達は政治組織の變革を促すやうになつて來たことは、武家政治の撤廢と幕府の衰亡とを餘儀なくせしめたもので、其の最後の運命に到達すべきは、もはや時の問題に過ぎないけれども、其の所謂時の問題なるものは、決して近い將來を意味するものではなく、遠い將來を意味するものであつた。假令、社會變革の兆が既に現れたとしても、それは單に萌芽を認めたのみである。萌芽が成長して樹木となり、花を開き實を結ぶまでには、なほ多くの歲月を要したに相違ない。又、尊王論が如何に發達したとはいへ、倒幕若しくは討幕の實行を見るのも、同じく時の力を借らなければならなかつたのである。然るに此の形勢を促進したものは、外國勢力の刺戟であつた。若し外國勢力の刺戟がなかつたならば、王政維新の出現は、なほ程遠い將來に於て行はれたであらう。果し

中道にして挫折す

て然らば外國勢力の刺戟こそ、幕府衰亡、王政維新の最大の原因であると斷定し得ると思ふ。

我が日本の國體に於て、皇室が常に中心であらせられることは、古今を通じて變りはないが、外國の刺戟のある毎に、特に御稜威の發揚を見るのである。別の語を以てすれば、外國の刺戟を受ける時は、必ず國體の本義に就いて自覺することの出來たのは、注意しなければならぬ。大化の改革がそれであり、明治維新がそれであつた。建武中興の如きも、一面に於ては弘安の役の刺戟もあつたが、引續いて國民を驚かすべき事件の發生を見なかつた爲に、中道にして挫折したのである。明治維新の際に至つては卽ち然らず、歐米列强の壓迫は未だ嘗て遭遇しなかつた程の大なる刺戟であつた。一歩を誤らば、國家民族の存亡に關すべき危機に瀕して居た。此の危機から免れる爲に、國民は期せずして國家の中心を皇

室に求め、所謂尊王攘夷の聲となり、茲に王政維新といふ一大政變が實行せられたのである。故に、予は王政維新の直接原因を以て、外國の刺戟と、外國の刺戟による尊王論の勢力とであると認めるのである。其の他の社會的經濟的原因の如きは殆ど語るに足りないと思ふ。

近時、一部の批評家の間には、王政維新を、英吉利や佛蘭西の革命と比較して、所謂第三階級の輩が封建貴族に反抗して起つた革新であると解釋する者多く、且、かなり有力であるかの如くに思はれるけれども、私は之に同意することが出來ない。なる程、江戸時代には町人閥が發達し、彼等は其の富を擁して、隱然武士階級を壓するの概があつたのは事實である。且、彼等の或者は、相當の知識を有し、自覺によつて動くべき力を有してゐたことも亦事實であるに相違ない。けれども徒に知識と力とを有するのみで、未だ此の

擡頭
タイトウ。

擁護
ヨウゴ。

井野邊茂雄
文學博士。國學院大學教授。高知縣の人。明治十年生。

力を動かすべき自覺を有しては居なかつた。當年の國民の意とする所は、たゞ如何にして歐米諸國の壓迫から免れて、國家の獨立を維持すべきかにあつた。故に其の改革運動は、純然たる政治運動である。我が國に於て、資本主義的色彩の鮮かになつたのは、明治以後殊に日露戰爭以後の事に屬する。蓋し、王政維新の既に成つた後、かねてから萌して居た社會變革の情勢が、之を動機として擡頭した。王政維新は其の原因であつて其の結果ではない。現に維新の志士中には多數の富豪があるけれども、彼等が幕府を倒し、又封建制度の破壞に努力したのは、他の志士と同じく國家を擁護せんが爲の手段であつた。要するに幕府の衰亡王政維新は、政治的原因に基づいて行はれたものといふべきである。

（井野邊茂雄—幕末史概說）

美を表現とすることを目的とする技術又は製作

三　美術に現れたる日本國民性

美術はその國の文化の華の開いたものであり、一國の文化は、その國民性を背景とするに至つて、始めてその光輝を發するものである。歷史を顧みれば、各國の文化には、その國民性を背景とした大きな流が、明瞭に認められるものである。

現代に於ては、我々がその社會の渦中にあつて種々の文化の傾向を見てゐる爲に、如何なる文化が眞にその國民性に適應すべきものであるか、甚だ不明瞭な場合が多い。今、繪畫に例をとつて見るに、舊來の日本畫と油繪と對立してゐるが、これを若し極く若い者が見るとしたならば、油繪の方が日本の國民性に適するものであると言ふであらうし、中年以上の者は日本畫の方が適しはしないかと考へるであらう。しかし、それは人々の考へやうで、西洋思想に多く親しんでゐる者には西洋畫が好まれ、日本のものを多く見てゐる者には、日本畫が好まれ易いのである。然しながら吾人は、日本國民全體の上から、その文化や趣味の傾向を考へねばならぬ。

渾沌たる社會

即ち過去の時代に溯つて、その時々の文化の變遷を見、藝術の變化の跡を見、而して更に現代の渾沌たる社會に對し、又藝術界に就いて考へて見ると、その間に或一筋の光明を見ることが出來る。美術に現れた日本國民性の如何なるものであるかといふことも大凡は考察することが出來る。

さて、誰しも日本は美術國だといふことを口にし、また實際それに相違は無いが、實は我が國の造形美術は、主として印度・支那・朝鮮等の美術の優れた所を攝取消化して大いに發達を成し遂げたものである。上代から大陸文化の刺戟を受けて、興隆の氣運に接し

たのである。我が國に藝術が開けてから此の方、その間幾多の變遷があり、幾多の名家を出し、世界に誇るべき優秀なる藝術品を產出してはゐるが、それらは多くは外來文化の影響を受けて出現したものである。もしかゝる外來文化の刺戟を受けることが無かつたら今日殘つてゐるやうな名作の數々は見るを得なかつた筈である。併しながら此處に考ふべきは、縱令その範を彼に仰いだにしても、それを我が國の趣味・風俗に適するやうに全部を改めてゐる。換言すれば、彼から受けた文化を更に日本化したものであり、この外國文化が消化されて、始めて我が國の特色が發揮されたのである。同じく大陸の影響をうけても、朝鮮の如きは、常に支那大陸その儘の文明を入れて、それを自國化することが出來なかつた。これ卽ち朝鮮と我が國とが根本的に相違してゐる所であり、日本文化が榮え、朝鮮の文化が獨立の光をなさない所以である。

推古朝　第三十三代推古天皇の御代を云ふ。（一二五二—一二八八）

六朝式　支那の吳・東晉・宋・齊・梁・陳の六代の頃の文化形式。

此處に、我が國民性の發露を見ることになり、藝術に於て、全く支那大陸とは違ふ別種のものとなり終せて居るのである。かやうな經路を考へつゝ、今遺存してゐるものに就いて考察して見よう。

さて、我が國の最古の藝術品として考ふべきものは、推古朝の藝術である。これは朝鮮半島を經由して、所謂六朝式を入れたのであるが、これは云ふまでもなく、聖德太子の偉大なるお力によるもので、その當時出來得る限り大陸の文化を吸收して、我が文化に盡されたといふことは、我が國の今日ある基を開かれたといふべきである。この時に於ける我が國文化の變化は、明治維新の時、歐米文明の影響を享けて、變化したものとは違ひ、全然大陸文明化した

中宮寺觀音

ものである。今日その當時の遺物として考ふべきものは、法隆寺及び其處にある寶物で當時の盛觀が偲ばれる。

次の奈良朝時代は、所謂天平時代で、誰しもその盛大なことを知つてゐるが、奈良附近を旅行してその當時を偲ぶものは、建築に於ても、彫刻に於ても、驚くべき發達をしてゐたことを認めるであらう。これ等は唐朝の文明が直接日本に入つたもので、これに依つて益〻我が文明の基礎は確立されたのである。從つて當時の文明は、總て支那かぶれで、その服裝・建築・調度類を始め、日常生活の樣式に至るまで、悉く支那的である。是に於て支那的趣味が十分我が

執金剛神

無智蒙昧

國を支配したのである。併しこれは、その當時に於ける宮廷一部のことで、我が國民全體がかやうな文明を持つたのではなく、都會を一歩離るればなほ多くは無智蒙昧の國民であつたのである。併し、この一部の者の文化が、後代の發達の根柢をなして居ることは見逃すべからざることである。

かやうにして入つた大陸文明を、我が國民に適するやうに、色々に變化したのは特に注意すべきで、次の平安朝には、遂に我が國民の自覺により、こゝに日本特有の文化を生ずるに至つた。これは、實に我が國の文化の尊き所以であつて、大陸文明の精神を消化し得たことに依るものである。

平安朝時代に至つて、國文學が發達し、藝術に於ても舊來我が國に見ることの出來なかつたものが起り、更に鎌倉時代にこれが完成した。しからば、我が日本文化の基礎は、推古朝・奈良朝にあると

搢紳　シンシン。官位。身分の高き人。
定朝　佛工。京都七條佛師の祖。京都の人。天喜五年（一七一七）歿。
運慶　名は譽。佛中法印と號す。康慶の子。彫刻家。歿年未詳。
湛慶　運慶の子。尾張法師と號す。彫刻家。歿年未詳。
賞鑒的

しても、それを純日本化して、我が國獨特の精華を發揮したのは、平安朝及び鎌倉時代であるといふべきである。

鎌倉時代には、文化は漸く貴族以外のものにまで及び、前時代よりもなほ一層文化の度を擴げることが出來た。即ち平安朝時代の宮廷及び搢紳達の文化が、鎌倉時代に入つてからは、普遍的の性質を帶び、かつ國民的藝術の發達を遂げてゐる。これを彫刻に見れば、天平時代は、その粹を極め能を盡してゐるが、これ實に唐朝彫刻の模倣である。然るに平安朝時代の終りに、定朝出で、鎌倉時代に運慶・湛慶が出で、寫實的な作風を以てし、此處に純日本的な彫刻が出現したのである。

これを繪畫の方面より考察すれば、早く佛畫の一體が、可なり精妙な域に達してゐたけれども、平安朝時代に國文學の展開を見るに及び、純賞鑒的な宗教的ならざるものが發達して、我が國特殊な

大和繪　我が國風の繪を支那風の繪に區別していふ語。
如拙　畫僧。もと明の人なれど應永年中九州に來る。後、京都に出でて畫を明兆に學ぶ。山水・人物・花鳥に長ず。
周文　字は等慶。越溪と號す。畫僧。近江の人。

繪畫が現れてゐる。而してこの流は、平安末期から鎌倉時代に至つて益〻榮え、所謂大和繪の一體を大成するに至つたのである。その描くところは、神社・佛寺等の緣起、或は高僧の繪傳等が少くないが、それ等の繪は、當時の實社會を率直に描き出してゐて、その題材とするところは、悉く我が國のことであり、我が國の風俗を描き現して、純粹の日本畫の大成を遂げたのである。大和繪の名稱は、漢畫に對する名であるが、これが日本繪畫の本流をなしてゐるのである。從つてこの大和繪を見れば、平安・鎌倉兩時代に於ける日本人の藝術に對する趣味を了解することが出來るのである。

然るに、その後、鎌倉末期から室町時代にかけて、藝術界に特殊な一派を生じて來た。これはいふまでもなく、當時の新派で、新に支那から入つて來た宋・元墨畫の一體で、禪宗趣味と關聯して、我が國藝術に一新樣を劃したのである。即ちこの派には、如拙・周文・雪舟

狩野派
日本畫の一派。支那の北宗畫より出で、剛健の筆致を用ふ。明應頃の狩野正信を祖とす。

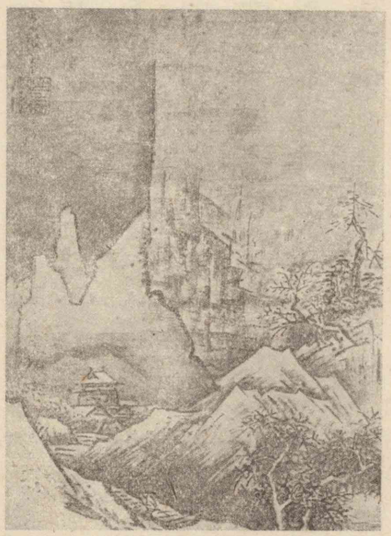
雲谷
本姓源氏。雲谷等顔、治平と稱す。畫僧。肥前の人。

蕭白
曾我蕭白。名は輝一。畫家。天明元年（二四一）歿。

土佐光信
土佐家の畫家。土佐三筆の一人。大永五年（二一八五）歿。

餘喘を保つ
東山時代室町時代の一區劃。美術工藝の時代。區分に用ひらる。即ち將軍足利義政が東山銀閣に退隱せしより、その薨去に至るまでの九箇年の間をいふ。

等の大家が出でてその根本をつくり、次いで狩野派が榮え、雲谷・蕭白の力によつて、舊來の大和繪を全く打壞してしまつた。その當時の大和繪界では、纔かに土佐光信が餘喘を保つ位に過ぎず、殆ど此處に大和繪の覆滅を見たのである。東山時代は、この流派の最も盛んな時で、水墨減筆の一體が旺盛を極め、我が日本藝術の大きな流を成した。然るに世は戰國時代となり、此處に日本の社會に大變革を生じた。かやうな時代では、英雄豪傑が徒手空拳を以て一國一城の主となつたので、是等の人は天眞爛漫の趣味を發揮して、舊來の如き禪味を帶びた藝術では滿足すべく



山水圖　雪舟筆

水墨減筆の一體
墨の濃淡を利用し色彩を加へず筆かずを省略する一體。

徒手空拳
天眞爛漫

繪卷物
繪畫を卷物にして詞書を添へたるものの稱。

もない。而もそれ等の人々には學問がなく、支那趣味を解さないから、俗眼を奪ふやうな華麗を極めたものでなければならない。此處に於てか、花鳥・動物などが描かれ、又當時の社會狀態を描いた新しい風俗畫が起つたのである。畫家はその新時代の要求に應じて、純日本的な立場に立ち、鎌倉時代の繪卷物から範をとり、新時代の要求に應じたものを作つた。當時の豪傑は、生れながらの日本人で、言ひ換へれば純日本趣味の日本人である。されば鎌倉時代から範をとつた日本趣味の藝術をもつて、その趣味に應じたのは當を得たことであつた。これをもつて見れば、大和繪が、日本藝術の大本で、國民性に叶つたものであることがわかる。

されば、桃山時代から江戸時代の初期までは、日本文藝復興の時期にして、その後は更に日本趣味の發達した時代である。德川三百年の間は、纔かに長崎の一角から外を見てゐたに過ぎないので、

光悅　本阿彌光悅。多賀氏。江戸初期の工藝家。刀劍鑑定家。畫をよくし光悅派を開く。寛永十四年歿。年八十。（二二一八—二二九七）

宗達　俵屋宗達。野々村氏。名は以悅。對青軒と號す。寛永年間の畫家。能登（石川縣）の人。寛永二十年歿。年六十八。（二二三六—二三〇三）

内地は益、日本趣味に榮えた。而して、色々の流派が生じ、藝術の燦爛たる花の時期となり、我が日本藝術の盛んな時代を出現したのであつた。

光悅に始まり、宗達・光琳を經て抱一に至る一派の如きは、その範を大和繪にとり、更にこれを醇化したものである。又近世風俗畫の一體の如きは、矢張範を鎌倉時代の繪卷物にとつて起つたもので、更にそれが江戸趣味といふ特殊なものとなつて、浮世繪版畫に繁盛したのである。その他、圓山・四條の諸派も、德川時代に於ける特殊な產物であつた。僅かに長崎から入つて來た西洋畫、南宗畫の一體もないではないが德川時代は、實に日本本來の藝術の燎爛華麗の花を開いた時代であつた。

明治となりては、西洋藝術の影響を受け、此處に日本藝術の上に一大變革を來したが、日本藝術は過去數百年の歷史を持つてゐる

浮世繪　うき世の風俗を畫きたる繪。土佐繪より分れ岩佐又兵衛の創めし畫風。

圓山・四條派　近世後期京都に興りし日本風な寫生を基とする二大畫派。卽ち寫生風の一派をたてし圓山應擧の圓山派と、蕪村の門にいで應擧について圓山派を研め、二者を合一完成した松村吳春の四條派との總稱。

南宗畫　支那に於ける繪畫の一大流派、唐の王摩詰よりおこるといふ。江戸時代に傳來して專ら文人の間に行はれたり。

悲母觀音　狩野芳崖筆

ので、一時は外來のものに傾いたが、また遂に日本的の趣味にかへり、更に歐米の特長をとり、これを加味したものが出來た。現代は各個人の考へに依つて、思ひ〳〵の藝術を成してゐる。舊來の日本畫も新來の油繪も共に榮えてゐるが、然し、この油繪の一體も、日本に於て描かれる以上は、日本の特色を發揮すべきで、外國のものとは違はねばならぬ。現代に於ては油繪が、既に日本的趣味に傾いたものが少くない。また日本畫も舊來のものとは違つて面目を一新した。

かやうに、過去の我が藝術界の有樣を見、その變遷の跡を尋ねて

來れば、前にも一言した如く、常に大陸の影響をうけては日本化し、また大陸の影響をうけてはその特徴を發揮したもので、それ〴〵の時代に、我が日本國民性の發露を窺ふことが出來る。藝術が一國文化の華であり、國民性の發露したものであるとすれば、幾多の藝術の流派は、その時の日本國民性を現したもので、その大本である本流が、我が日本を代表したものであると言はねばならぬ。然らば平安朝時代、鎌倉時代のもの及び德川時代のものが、我が日本國民性を最もよく現したものと見るべきである。

要するに、國民性はその國民の住する國土に深く根ざして居り、總ての美術、總ての文化は、皆その國土と特殊な關係を結んで居る。美術殊に繪畫は、自然の模倣を離れ難いために、益その國土と密接な關係を持つのである。これまでの傾向を見ると、何時でも外來のものが加はつて、こゝに新しい生命を加へられたが、現代のやうに外來の刺戟の多い時には、何れを何うと見定めることは頗るむづかしいことであるが、やがてこの刺戟から新しいものが生れ、而してこれがまた國民性を代表することになるのである。

されば國民性の如何なるものなるかを簡單に說明することは、容易でないとしても、美術にあらはれた本流、例へば大きな畫風の變遷の上には、よく國民性の移り變りを窺ふことが出來る。卽ち國民性は、美術の上に形として表されて居るから、美術の研究は國民性の考察に多大の便利を與ふることとなるのである。

（藤懸靜也）

藤懸靜也
文學博士。美術批評家。國學院大學教授。茨城縣の人。明治十四年生。

元祿
東山天皇の御代の年號。（一三四八—一三六三）

季吟
姓は北村氏。國學者。和歌・俳諧に名あり。松永貞德・安原貞室に學ぶ。寶永二年歿。年八十二。（一二一八四—一三六五）

談林
西山宗因の開きたる俳風。貞德門流の方式を排除して、自由なる俳諧を始む。延寶頃には、人氣に投じて遂に貞德門流を壓倒して、名聲を馳す。

四　元祿文壇の三文豪

元祿時代は、我が文學史中で最も光彩ある時代で、種々の方面に人物の打揃うて輩出したことは、空前といふべきである。中にも井原西鶴・松尾芭蕉・近松門左衞門の三人はその尤なるものである。三人の中で、西鶴が一番年長者で、芭蕉はこれより二歲若く、近松は又芭蕉より九歲下であつたが、その事業の世に現れたのは殆ど同時といつてよい。しかも、此の三人が京・大阪・江戸と三方に分れ、それが又小說・俳諧・戲曲の三方面に各革新の事業を企てて、いづれも立派に成功して、その歷史に新紀元を開いたのも面白い現象である。

芭蕉は早くから俳諧に親しみ、或は季吟の門に學び、或は談林の風を慕うてゐたが、四十一歲の時に至つて、遂に一流を開いた。そ

笠きて云々
野ざらし紀行に、「年暮れぬ笠きて草鞋穿きながら。」とあり。

誘掖

蕉風
芭蕉の開きたる俳風。正風ともいふ。

貞門
松永貞德の開きたる俳諧の門流。

れから死に至るまでの十年間は、大抵行脚に出て、笠きて草鞋はきながら年を暮らし、自然と同化して幽玄閑寂の思想を養ひ、一日も修養を怠らぬと共に、到る處にその道を傳へて後進を誘掖したので、門人は天下に滿ち、終に蕉風卽ち俳諧、俳諧卽ち蕉風といふ有樣となつた。貞門・談林の徒が遊戲視した俳諧は、芭蕉によつて極めて眞面目に嚴格な態度を以て取扱はれ、最早駄洒落や輕口・頓智のいひ放しでなく、詩歌と同等の內容をもち、それと對等の位地を占むるに至つた。宗因の、

世の中や蝶々とまれかくもあれ

には、輕快な浮世を茶化した一種の詩趣はあるが、芭蕉の

起きよ起きよ我が友にせん寢る胡蝶

に至つては、眞摯な人情の溫味が出てゐるではないか。

芭蕉は和歌・連歌の因襲的趣味に囚はれず、汎く詩材を求め、新に

法式に拘泥す

詩境を開き、和歌・連歌に用ひられた材料でも、一種新しい見方で鑑賞して、著しく俳諧の内容を變化せしめたのみでなく、形式に於ても、談林の無法則をも主張せず、さりとて貞門の法式にも拘泥せず、まづ一通りは法式に據るものの、必要に應じてはこれを打破して束縛に甘んじなかつた。芭蕉の俳諧は、高雅であり、獨特の趣味の上に立つて居るから、眞にその趣味を解して是を味はふには、その道の修養を積まなければならぬ。暇つぶしの慰みにする俳諧、それもあつてよいけれども、芭蕉のめざす所は、決してそんなものではなかつた。

端的

西鶴と近松との二人は、丁度芭蕉が連歌や貞德派の俳諧の束縛を脫して新しい詩境を開いたのと同樣に、これまでの古い文章や古い型を破つて、端的に社會・人間を寫さうと企てたものである。

驍將

西鶴は始め談林の驍將として大阪に住んでゐた。彼が四十一

喝采を博す

歳の時に初めて小說に筆を染めたが、元來西鶴の才は特に世態人情を寫すと云ふやうな方面に適して居たので、その作品は全く目新しい趣向である上に、文章は多年俳諧で鍛へあげた、腕の冴えた、簡潔な力の籠つたものであつたから、非常な喝采を博した。それで乘氣になつて、小說の方に熱中して居る中に、蕉風が次第に盛んになつて、談林の林に秋風が吹きそめたので、遂に本職の點者の方は疎かにして、小說家として身を終ふるに至つたのである。

點者

他人の和歌・俳諧などに批點を加ふる人。

近古小說

平安朝文學の系統を追ひし擬古物語、及び婦女子の讀物たるお伽草子と稱するものあり。

井原西鶴

西鶴の鋭利な觀察や簡勁な文章は、眞に我が文學史中に獨步すべきものである。元祿以前の近古小說は、まだ純粹の小說らしい

浄瑠璃
室町時代末期既にその名稱あり て、始めは浄瑠璃姫物語を扇拍子にて語り、慶長頃には、三味線にて伴奏すること始まり、又人形に仕掛け、或は舞踊を伴なひ、或は全然音曲として行はるるに至れり。

幸若の舞
物語を音曲に合はせて、扇拍子に大小の鼓を用ひて舞ふもの。室町時代後半より江戸時代の寛文・延寶頃まで行はる。

都萬太夫
越後掾と稱す。浄瑠璃語り。京都の人。

體裁をなして居ないで、如何にも古臭い趣向を、古臭い文章で型の如く極り文句の形容澤山に述べたに過ぎなかつたが、西鶴が出て、昔の型や極り文句を排斥して、當時の言葉を以て當時の社會を寫し、生氣潑剌たる新小説を作り出して當時の文壇を風靡した。これが西鶴の偉大な所以である。

西鶴以前の小説が詰らなかつたと同様に、近松以前の浄瑠璃も殆ど見るに足らぬものであつた。幸若の舞曲やお伽草子のやうなものに少しばかり修正を加へて語られたのが、次第に新作も出るやうになつたものの、しかしそれとても、孰れも室町時代の物語風の系統を引いたものであつて、荒唐無稽な英雄談や神佛の靈驗話に過ぎないで、現實の生活とは殆ど無關係な夢のやうなものが多かつたのである。其の作風を一變したのが近松である。

彼が二十五歳の時、都萬太夫座の爲に脚本に筆を染めて大喝采

井上播磨掾・宇治加賀掾
共に寛文頃の浄瑠璃語り。

義太夫
竹本義太夫。姓は藤原、名は博教。義太夫節の始祖。正德四年歿。年六十四。（一三一一—一三七四）

妙舌

古浄瑠璃
竹本義太夫以前の浄瑠璃を稱す。以後を新浄瑠璃と稱す。

舞曲本
幸若舞の詞。

を得て以來、幾多の歌舞伎狂言を作ると同時に、井上播磨掾や宇治加賀掾等の爲にも浄瑠璃を作つて與へた。義太夫が大阪に下つて竹本座を創立するに方つて、近松は「出世景清」の新作を與へて出世の二字に前途の幸多からんことを祈つた。此の頃近松はまだ京都に住んで居たが、ついで大阪に下り、元祿十六年五月、世話物の初作に大當りを得てからは、全く大阪に定住して專ら義太夫の爲に思を凝らし筆を走らせて、年々幾多の新曲を出し、遂に百餘篇の多きに及んだ。その世話物も時代物も、義太夫の妙舌と相俟つて、浄瑠璃をして浪花名物の隨一たらしめたのである。

西鶴の小説は、最初から成功して居るが、近松は寧ろ西鶴よりも芭蕉の方にその進歩の順序が似て居る。芭蕉の俳諧が最初貞門や談林に彷徨うて居たやうに、近松も最初の間は古浄瑠璃の眞似をやつて居た。中には舞曲本や謠曲の丸取りのやうな所もあつ

て、兎角物語風に流れて、戲曲の體裁を具へず、時間・空間の移り變りにも極めて無頓著なことをやつて居た。これ等の短所をすつかり除き得て、立派な戲曲の出來るやうになつたのは、芭蕉と同じやうに四十歳を過ぎてからである。

以上の三人は、其の人物性格に於てもそれ〴〵違つて居り、又活動した方面も違つて居るが、孰れも元祿文學に新機運を導いて、從來の面目を一新した人々である。傳襲的の舊套を打破して古い型に依らず、前人の思想を其のまゝに借り來ることをもせず、自己の見聞感得に基づいて眞實を寫した點に於て、相一致して居る。即ち芭蕉は天地四時の情景を寫し、西鶴は現實の社會の表裏を暴露し、近松は義理人情の曲折を描いたのである。此の傳襲的思想形式を排斥して、新しい文學を起したと云ふことが、此の三人の偉大な所以である。

（藤井乙男―江戸文學研究）

舊套を打破す

藤井乙男
號は紫影。文學博士。國文學者。京都帝國大學名譽教授。兵庫縣の人。明治元年生。

奥の細道
一卷。松尾芭蕉の紀行文。
月日は云々
古文眞寶後集に李太白の春夜宴桃李園序として、「夫天地者萬物逆旅、光陰者百代過客。」とあるによる。過客は旅人。
去年の秋
元祿元年（一六八八）信濃の更科を經て江戸に歸りし時。
江上の破屋
隅田川の邊なる深川の芭蕉庵。
白河の關
福島縣西白河郡古關村にあり。
そゞろ神
人の心を誘惑する魔神。

五　奥の細道抄

一

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の關越えむと、そゞろ神のものにつきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取る物手につかず、股引の破れをつゞり、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に讓り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞ雛の家

杉風　名は杉山一元。採茶庵と號す。俳人。芭蕉の後援者として聞ゆ。江戸の人。享保十七年歿。年八十六。（二三〇七―二三九二）

面八句　オモテハツク。懐紙を綴ぢて連句を記す時、初めの紙の表には八句しるすをいふ。

月は云々　源氏物語帚木の巻に、月は有明にて光をさまれるものから、影さやかに見えてなか〳〵をかしき曙なり。」

谷中　東京市下谷區。

千住　江戸時代、奥州街道の最初の宿驛。今東京市足立區。

面八句を庵の柱に懸置き、彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峰かすかに見えて、上野・谷中の花の梢又いつかはと心細し。睦まじきかぎりは宵より集ひて、船に乘りて送る。

二　離別

千住と云ふ處にて船をあがれば、前途三千里の思、胸にふさがりて、まぼろしの巷に離別の涙を濺ぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の始めとして、行く道なほ進まず。人々途中に立ちならびて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚只かりそめに思立ちて、吳天に白髮の恨みを重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬ境、若し生きて歸らばと、定めなき頼の末をかけ、其の日やう〳〵草加と

三千里云々　源氏物語須磨の巻に、來し方の山は霞遙かにてまことに三千里の外のこゝちするに。」とあり。

矢立の始め　吳天云々　白樂天の詩に、「去年九月到二東洛一、今年九月來二冥郷一。兩邊蓬鬢一時白、三處菊花同色黄。」

草加　埼玉縣北足立郡草加町。

身すがらに　身一つで何も持たずに。

紙子　カミコ。紙製の衣。

さり難き　よんどころなき。

いかで云々　拾遺和歌集、平

いふ宿にたどり著きにけり。痩骨の肩に懸れる物先づ苦しむ。只身すがらにと出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨・筆のたぐひ、あるは、さり難きはなむけなどしたるは、さすがに打捨て難くて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

三　白河の關を越ゆ

心許なき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて、旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしも理なり。中にも、此の關は三關の一にして、風騷の人、心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほ哀れなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、雪にも越ゆるこゝちぞする。古人冠を正し、衣裝を改めしことなど、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴著かな　曾良

四　松島

兼盛の歌、「たよりあらばいかで都につげやらむ今日白河の關は越えぬと。」

三關　奥羽三關。うやむやの關・鼠の關・白河の關。

風騷の人　詩歌の道にたづさはる人。

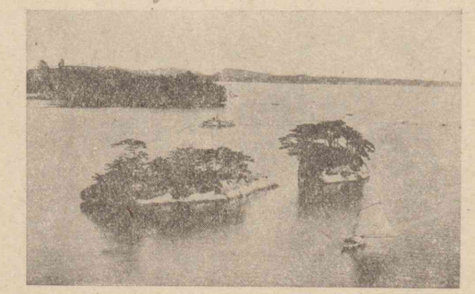
秋風を云々　後拾遺和歌集、能因法師の歌、「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關。」

紅葉を云々　千載和歌集、源頼政の歌、「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關。」

古人云々　清輔の袋草子に、竹田大夫國行といふ者陸奥に下向の時、白河の關を過ぎんとして、能因の歌を

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、欹つものは天を指し、臥すものは波に匍匐ふ。或は二重に重なり、三重に疊みて、左に分れ、右につらなる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠こまやかに、枝葉潮風に吹き撓められて、屈曲おのづから矯めたるが如し。其の氣色、窅然として美人の顏を裝ふ。ちはやぶる神の昔、大山つみのなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆を振ひ、詞を盡さむ。

雄島が磯は、地つゞきて海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木蔭に、世を厭ふ人もまれ〳〵見



松島

憶ひ、いかで平服委にて越ゆべきとて裝束を改めたる由見ゆ。

清輔　藤原清輔。歌人。正四位皇太后宮大進に到る。治承元年歿。年七十四。（一七六四—一八三七）

曾良　名は河合惣五郎。俳人。美濃の人。芭蕉の門人。寶永七年歿。年六十。（一六四一—一七一〇）

扶桑　日本國の異名。

浙江　セツカウ。支那浙江省杭州府にある川。杭州灣の潮の江中に逆流するより、古來浙江の潮として有名なり。

窅然　エウゼン。

え侍りて、落穗・松笠など打煙りたる草の庵、閑かに住みなし、如何なる人とは知られずながら、まづなつかしく、立寄るほどに、月海にうつりて、晝の眺また改まる。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、あやしきまで妙なるこゝちはせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

五　平泉

十二日、平泉とこゝろざし、姉葉の松・緒絶の橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兎・蒭蕘の往きかふ道、そこともわかず、終に道ふみたがへて石の卷といふ港に出づ。「黄金花さく」と、詠みて奉りたる金華山、海上に見渡し、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて、竈の煙たち續けたり。思ひかけずかゝる處にも來れるかなと、宿からむとすれど、更に宿かす人なし。漸うまどしき小家に一夜を明かして、明く

雲居禪師　ウンゴゼンジ。京都妙心寺の禪僧。後、松島瑞巌寺に移る。萬治二年歿。年七十八。（一二四二―一三一九）

平泉　岩手縣西磐井郡の村。

姉潟の松　宮城縣栗原郡澤邊村大字姉潟にありし名松。

緒絶の橋　同縣志田郡古川町にある橋。

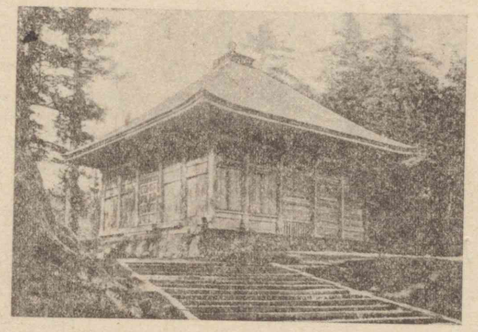
雉兎・葛藤　石の卷宮城縣牡鹿郡の町。

黄金花さく　萬葉集の歌による。

戸伊摩　宮城縣登米郡登米町。

三代　藤原清衡・基衡・秀衡。

れば、また知らぬ道まよひ行く。袖のわたり・尾ぶちの牧・まのの萱原など、よそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一宿して、平泉に至る。その間、二十餘里ほどとおぼゆ。



金色堂

三代の榮耀、一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は、田野になりて、金鶏山のみ形をのこす。先づ高館に上れば、北上川、南部より流るゝ大河なり。衣川は、泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打敷

一睡の中云々　盧生の故事。

秀衡　基衡の子。鎮守府將軍・陸奥守。文治三年（一八四七）歿。

高館　平泉驛より北方約六百米。衣川館ともいふ。

南部　盛岡市及びその附近一帶の稱。

衣川　岩手縣膽澤郡の西境に發し、東流して北上川に合流す。

泉が城　中尊寺の西北約一粁。

國破れて云々　杜甫の詩による。

兼房　義經の臣增尾兼房。高館落城の際に白髮を被りて奮戰して死す。

きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白髮かな　曾良

松尾芭蕉

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽敗空虚の叢となるべきを、四面新に圍みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、暫く千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂

（松尾芭蕉―奥の細道）

最上川　源を山形・福島縣境にある吾妻山北陰に發し、北流して山形新庄の盆地を經て酒田港に注ぐ。本邦三急流の一。

清瀧　京都市西部。大堰川の上流。高尾・栂尾・槇尾の谿間を流るゝ清流。

六　蕉　風

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏　芭蕉

ほとゝぎす大竹藪を漏る月夜

五月雨をあつめて早し最上川

清瀧や浪にちり込む青松葉

しづかさや岩にしみ入る蟬の聲

此の道や行く人なしに秋の暮

名月や池をめぐりて夜もすがら

名月や門にさし來る潮がしら

去來　向井氏。俳人。蕉門十哲の一人。肥前の人。寶永元年歿。年五十四。（二三一一—二三六四）

其角　寶井氏。蕉門十哲の一人。江戸の人。寶永四年歿。年五十六。（二三一二—二三六七）

嵐雪　服部氏。蕉門十哲の一人。江戸の人。寶永四年歿。年五十四。（二三一四—二三六七）

菊の香や奈良には古き佛たち　去來

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

秋風や白木の弓に弦はらむ　其角

應々といへど叩くや雪の門

夕立や家をめぐりてあひる鳴く

名月や疊の上に松の影

黄菊白菊その外の名はなくもがな　嵐雪

許六　森川氏。蕉門十哲の一人。近江の人。正德五年歿。年六十。（二三一六—二三七五）

丈草　内藤氏。蕉門十哲の一人。尾張犬山侯の重臣なりしが、後隱遁す。寶永元年歿。年四十五。（二三二〇—二三六四）

凡兆　蕉門十哲の一人。金澤の人。本名・歿年未詳。

惟然　廣瀨氏。蕉門の俳人。美濃の人。正德五年（二三七五）歿。

支考　各務氏。十哲の一人。美濃の人。享保十六年歿。年六十七。（二三二五—二三九一）

清水の上から出たり春の月　許六

大原や蝶の出て舞ふおぼろ月　丈草

ほとゝぎす鳴くや湖水のさゝ濁り

市中は物のにほひや夏の月　凡兆

下京や雪つむ上の夜の雨

長々と川一筋や雪の原

水鳥や向うの方へつういゝ　惟然

叱られて次の間に立つ寒さかな　支考

補陀落や云々　西國三十三所巡禮札所の第一番、和歌山縣那智山青岸渡寺の御詠歌。

故里を云々　同第二番、和歌山縣紀三井山護國院金剛寶寺の御詠歌。

七　巡禮歌

「補陀落や、岸打つ波は三熊野の、那智のお山に響くたきつ瀨。」年はやう〳〵とほ〳〵の、道をかけたる笈摺に、「同行二人」と記せしは、一人は大悲の蔭賴む、「故郷を遙々こゝに紀三井寺、花の都も近くなるらむ。」「巡禮に御報謝。」と言ふも優しき國訛。「てもしをらしい巡禮衆。どれ〳〵報謝進ぜう。」と、盆に精げの志。「あい〳〵、有難うござります。」と言ふ物越から爪はづれ、「可愛らしい娘の子。定めて連衆は親御達、國は何處。」と尋ねられ、「あい、國は阿波の德島でござります。」「むゝ、何ぢや德島。さつても、それはまあ懷かしい。私が生れも阿波の德島。そして父樣と母樣と、一緒に巡禮さんすのか。」「いえいえ、その父樣や母樣に逢ひたさ故、それで私一人西國するのでござります。」と、聞いてどうやら氣にかゝる。

吃驚

夫婦は今にも云云

人々の爲に藩の禁を犯せしによる。

お弓は猶も傍に寄り、「むゝ、父様や母様に逢ひたさに、西國するとはまあどうした譯ぢや。それが聞きたい。まあ、其の親達の名は何といふぞいの。」「あい、どうした譯ぢや知らぬが、三つの年に父様や母様も、私を祖母様に預けて、何處へやら行かしやんしたげな。それで、私は祖母様の世話になつてゐたけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顏見たい。それで方々と、尋ねて歩くのでござります。父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します。」と、聞いて吃驚、お弓は取附き、「これ〳〵〳〵、あの父様は十郎兵衛、母様はお弓、三つの年別れて、祖母様に育てられてゐたとは。」疑もない我が娘と、見れば見る程稚顏、見覺えのある額の黑子。「やれ、我が子か、懷かしや。」と、言はむとせしが、いや待て暫し。夫婦は今にも取らるゝ命、素より覺悟の身なれども、親子と言はばこの子にまで、どんな憂き目がかからうやら。それを思へば生中に、名のりだてして憂き目を見むより、名のらでこの儘返すのが、却つてこの子の爲ならむと、心を靜め、よそ〳〵しく、「おゝ〳〵、それはまあ〳〵、年端も行かぬに遙々の處を、よう尋ねに出さしやつたなう。その親達が聞いてなら、さぞ嬉しうて嬉しうて、飛立つやうにあらうが、儘ならぬのが世の憂き節、身にも命にも代へて可愛い子を振棄てて、國を立退く親御の心、よく〳〵の事であらう程に、酷い親と必ず〳〵恨まぬがよいぞや。」「いえ〳〵、勿體ない。何の恨みませう。恨むることはないけれど、小さい時別れたれば、父様や母様の顏も覺えず、餘處の子供衆が、母様に髮結うて貰うたり、夜は抱かれて寢やしやんすを見ると、私も母様があるなら、あのやうに髮結うて貰ふものと、羨しうござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい。ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす。」と、泣いじやくりするいぢらしさ。

母は心も消入る思。「さても〳〵世の中に、親となり子と生るゝ

程、深い縁はなけれども、親が死んだり子が先立つたり、思ふやうにならぬが浮世。此方もどれ程尋ねても、顔も處も知らぬ親達、逢はれぬ時は詮ない事。まう尋ねずと、國へ去んだがよいわいの。」「いえいえ、戀しい父様や母様、假令何時まで懸つてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅ぢやてて、何處の宿でも泊めてはくれず、野に寢たり、山に寢たり、人の軒の下に寢ては擲かれたり、怖い事や悲しい事。父様や母様と一緒にゐたりや、こんな目には逢ふまいものを。何處にどうしてゐやしやんすぞ。逢ひたい事ぢや、逢ひたい。」と、わつと泣出す娘より、見る母親は堪りかね、「おゝ、道理ぢや。可愛や、いぢらしや。」と、我を忘れて抱きつ

お鶴　栗原玉葉筆

き、前後正體歎きしが、これ程親を慕ふ子を、何とこの儘去なされう。いつそ打明け名のらうか。いや〳〵、それではこの子も同じ罪。その時の悲しさを、思ひ廻はせば去なすが爲と、「おゝ、段々の様子を聞き、わが身のやうに思はれて、悲しいとも情ないとも、言ふに言はれぬ事ながら、兎角命が物種、まめでさへ居りや、また逢はれまいものでもない。これ、しつけぬ旅に身を痛め、患ひでも出りや悪い。何處をしやうどに尋ねうより、その祖母様の方へ去んで居るとの、追附父様や母様が逢ひに行てぢや程に、悪い事は言はぬ、思ひ直してこれから直ぐに國へ去んで、隨分まめで、親達の尋ねて行かしやるのを待つて居るのがよいぞや。」と、宥めすかすを聞分けて、「あいあい、忝うござります。お前がそのやうに言うて、泣いて下さりますによつて、どうやら母様のやうに思はれて、私や此處が去にとむない。どんな事なと致しませう程に、まうし御家様、お前の傍に何時

しやうど　目あてとする處。

御家様　主婦の敬稱。

豆板　昔の銀貨。豆銀ともいふ。

小判　江戸時代の金貨。

までも、私を置いて下さりませ。」「えゝ、悲しい事を言出して、又泣かすのかいの。　先にから私も子のやうに思うて、此處に置きたい、去なしとむないと、樣々思ひ廻はせども、此處に置いてはどうも爲にならぬ事があるによつて、それでつれなう去なすのぢや程に、聞分けて去んだがよいぞや。」と、言ひつゝ内へ針箱の、底を探して豆板の、まめなを悅ぶ餞別と、紙に包んで持つて出で、「これ、何ぼ一人旅でも、たんと錢さへありや泊める。　僅かなれども志、この銀を路銀にして、早う國へ去にや。　必ず〳〵患うてばしたもんな。」と、銀を渡せば押戻し、「嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物を、たんと持つて居ります。　そんなりや、まう參じます。　忝うございます。」と泣く〳〵立つを引留め、「それはさうでも、これは私が志。」と無理に持たして塵うち拂ひ、「これ、まう去にやるか。　名殘が惜しい、別れとむない。　これ今一度顏を。」と引寄せて、見れば見る程胸迫り、離れ難なき憂き思。

父母の云々　西國三十三所巡禮札所の第三番。和歌山縣補陀落山施音寺（粉河寺）の御詠歌。

近松半二　淨瑠璃作者。大阪の人。天明三年歿、年五十九。（一七二三―八五）

それと知らねど誠の血筋、名殘惜しげに振返り、「何處をどうして尋ねたら、父樣や母樣に逢はれる事ぞ。　逢はしてたべ、南無大悲の觀音樣。　父母の惠も深き粉河寺、佛の誓賴もしきかな。」

泣く〳〵別れ行く跡を、見送り〳〵、伸び上り、「これ今一度こつち向いてたも。　折角、長の海山越え、艱難して憧れ尋ぬるいとし子に、不思議と逢ひは逢ひながら、名のらで去なす母が氣は、どの樣にあらうと思ふ。　狂氣半分、半分は死んで居るわいの。　まだ生ひ先のある子をば、親ゆゑ路頭に立たすか。」と、そのまゝ其處にどうと臥し、消入るばかり歎きしが、起きなほつて涙を抑へ、「いや〳〵どう思ひ諦めても、今別れてはまた逢ふ事はならぬ身の上、假令難儀が懸らば懸れ、又その時は夫の思案。　程は行くまい、追附いて、連れて戻らう。　さうぢやさうぢや。」と、子に迷ふ、道は親子の別れ道、跡を慕うて尋ね行く。

（近松半二―傾城阿波鳴門）

於蘭陀　オランダ。當時徳川幕府は、外國との交通を禁止し、纔かに天主教に關係なきこの國のみに來航を許したり。蘭學は當時に於ける唯一の洋學なりき。

もはら　もっぱらに同じ。

なづむ

おもむけいふ　說きなす。論を進む。

八　物まなび

一　於蘭陀といふ國のまなび

ちかき年ごろ、於蘭陀といふ國の學問をする事はじまりて、江戸などにそのともがらかれこれとあめり。ある人、もはらそのまなびをするがいひけるおもむきをきくに、「於蘭陀は、その國人、物かへに遠き國々をあまねくわたりありく國なれば、その國の學問をすれば、遠き國々のやうをよくしる故に、漢學者のかの國にのみなづめるくせのあしきことの知らるゝなり。あめつちのあひだ、いづれの國もおの〳〵その國なれば、必ず一むきにかたよりなづむべきにあらず。」とやうにおもむけいふめり。

そはかのもろこしにのみなづめるよりはまさりて、一わたりさることとは聞ゆれども、なほ皇國の萬の國にすぐれて尊きことを

我　我意。わが儘。

しひごと

ば知らざるにや。萬の國の事をしらば、皇國のすぐれたるほどはおのづからしるならむものを、なほ皇國を尊むことを知らざるは、かのなづめるをわろしとするから、たゞなづまぬをよしとして、又これになづめるにこそあらめ。於蘭陀のにはあらぬよのつねの學者にも、今はこのたぐひもあるなり。

二　物まなびはその道をえらびて入りそむべき事

ものまなびに心ざしたらむには、まづ師をよくえらびて、その立てたるやう、教のさまをよくかむがへて、したがひそむべきわざなり。さとりにぶき人はさらにもいはず、もとより智（さとり）とき人といへども、大かたはじめにしたがひそめたるかたに、おのづから心はひかるゝわざにて、その道のすぢわろけれど、わろきことをさとらず、又後にはさとりながらも、としごろのならひはさすがにすてがたきわざなるに、我とかいふ禍神さへ立ちそひて、とにかくにしひご

かいなでに　物の表面のみにて。一とほりえんなる　よしめきて　仔細ありげに。かたはらいたく

見しれらむ

としてなほそのすぢをたすけむとするほどに、終によき事はえ物せで、よのかぎりひがごとのみして、身ををふるたぐひなど世におほし。かゝるたぐひの人は、つとめて深くまなべば、まなぶまにまに、いよ〳〵わろきことのみさかりになりて、おのれまどへるのみならず、世の人をさへにまどはすことぞかし。かへす〴〵はじめより師をよくえらぶべきわざになむ。

三　今の人の歌文ひがごと多き事

ちかき世の人のは、うたも文も大かたはよろしと見ゆるにも、なほひがごとのおほきぞかし。されどそのたがへるふしを見しれる人、はた世になければ、たゞかいなでにこゝかしこえんなる詞をつかひ、よしめきてよみなし、かきちらしたるをば、まことによしと見て、人のもてはやし、ほめたつれば、心をやりてしたりがほすめる、いとかたはらいたく、をこがましくさへぞ思はるる。さるにつけては、かくいふおのがものすることも、なほいかにひがごとあらむと、物よく見しれらむ人のこゝろぞはづかしかりける。人のひがごとのよく見えわかるゝにつけては、我はよくわきまへたれば、ひがごとはせずと思ひほこれど、いにしへのことのこゝろをさとりしるすぢは、かぎりなきわざにしあれば、この外あらじとは、いとなむさだめがたきわざなりける。

四　萩の下葉

人は來ずはぎのした葉もかつ散りてあらしはさむし秋の山ざと

はもじを重ねたる、古の歌どもを見て、ふとをかしきふしにおぼえたるまゝに、われもいかでとよみ出でたるなり。聞えてやあらむ、聞えずやあらむ。われは聞えたりと思ふとも、人の見たらむには、如何あらむ、聞えずやあらむ、知らずかし。

（本居宣長―玉かつま）

九　すがのあら野

信濃なるすがのあら野を飛ぶ鷲のつばさもたわに吹く嵐かな　　賀茂眞淵

ゆふされば海上がたの沖つかぜくもゐにふきて千鳥なくなり　　楫取魚彦

水無月のなかの十日のなか空にいともかしこき日のみ面かも　　楫取魚彦

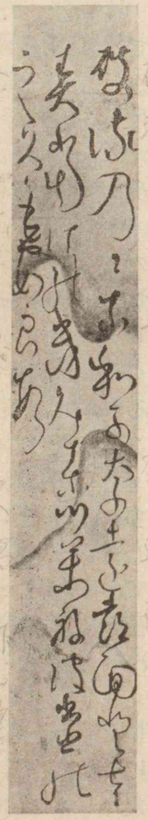
天の原吹きすさみたる秋風にはしる雲あればたゆたふ雲あり　　田安宗武

楫取魚彦
茅生と號す。歌人。下總の國佐原の人。天明二年歿。年六十。（一一三八三—二四四二）
水無月
陰曆六月の異稱。

武藏野を人はひろしとふ吾はたゞ尾花わけすぐる道としおもひき　　良寛

まなばでもあるべくあらば生れながら聖にてませどそれなほし學ぶ　　良寛

道のべにすみれつみつゝ鉢の子を忘れてぞこしその鉢の子を　　良寛



良寛筆

うづまさのふかき林をひゞきくる風の音すごき秋のゆふぐれ　　小澤蘆庵

はるのゝにわかなをつめとさすたけのきみとつまねはたのしくもあらす

小澤蘆庵
名は文中。歌人。享和元年歿。年七十九。（一二三八三—二四六一）

波となり小舟となりてゆふぐれの雲のすがたぞ果は消えゆく

香川景樹

うづみ火のほかに心は無けれどもむかへば見ゆる白鳥の山

てる月のかげのちりくるこゝちして夜ゆく袖にたまる雪かな

橘曙覽

春にあけてまづ讀む書も天地のはじめの時とうちいづるかな

賤が家はひりせばめて物うゝる畑のめぐりのほゝづきの色

橘曙覽　國學者。歌人。越前の國福井藩士。明治元年歿。年五十七。（一二四七―一二五八）

永祿　正親町天皇の御代の年號。

公家　コウカ。コウケ。おほやけ。官家。

莊園　シャウエン。サウエン。平安時代以後權勢ある人々竝に社寺の私有地で莊の號のある土地の稱。

一〇　中世に於ける京都の經濟

桓武天皇の平安遷都以來、足利氏の末葉永祿の初めまで約七百六十餘年、その間一貫して帝都であり、政治の實權武門に歸せし後も、唯一時鎌倉幕府時代と稱する百四十餘年を除く外は、名實共に政治の中心であつた京都は、同時に學問・藝術・宗教乃至は經濟上にも、依然として中心たる實を失はなかつた。

地方の重要なる部分が、專ら公家・寺院の莊園に歸した時代に在つては、多額の貢租は毎年京都に輸せられて、京都はいやが上にも富裕を加へるのみで、恰も日本の富は卽ち京都の富に外ならなかつた樣に見える。かくの如き時代に當つて、平泉の藤原氏が白川の關以東、陸奥六郡を掩有して富强を極めたことは、天下兩分の概あるもので、新興の勢を以てせる賴朝も容易にこれに手を著ける

平泉
岩手縣磐井郡平泉村。
藤原氏
藤原清衡・基衡・秀衡をさす。

兵火の巷

ことを得なかつたのである。然るに形勢一轉して、武家の勢力が強大となり、公家・寺院が依つて以て生活上の資源と仰いだ土地と離るゝに及んでは、その苦艱は知るべしである。鎌倉幕府の初頭に當つて、土地支配權に關する訴訟の特に多かつた一の理由は、實に茲に存するのである。

されば鎌倉時代に於いては、その政治の實權の所在地たる鎌倉が、關東の一名邑として急速の發展をなしたに反し、既に都市として發展すべき限りを盡した京都は、最早より以上の發展をなすべき資力がなくなつたかの觀があつた。その後、京都は幾度か兵火の巷となつて、荒廢せざるを得なかつた。亂世の後、帝都としてもまた幕府の所在地としても、小康を得た京都は、全國の重なる守護大名が、大抵邸宅を此の地に設けて居たので、幸ひに疲弊を回復し得て、舊觀に復した事であらうが、これとて平安時代の如き盛況は、

坊の津
鹿兒島縣川邊郡西南方村。

經濟的消費地
物貨の集散

應仁・文明の大亂
後土御門天皇の應仁・文明年間に於ける室町幕府内の權勢爭亂。

果して見るを得たであらうか。特に、支那貿易の開始と共に、九州に於ける博多・坊の津、近畿地方に於ける堺や兵庫の如き潑剌たる生氣はなかつたものと察せられる。

さりながら兎にも角にも一國の首都であり、政治の中心地である京都は、よしんば經濟的には生產地でないにしても、大なる消費地であるから、物貨の集散は勿論、頗る盛に行はれたことであつて、彼の應仁・文明の大亂迄は、睡眠火山の上に坐するがごとくであつたものの、尙ほ傳統的に幕府の威力を認められて、各種の產業も相應に營まれたものと思はれる。然るに前後十一年に亙れる應仁・文明の大亂によつて、東西兩軍はその首領を失ふに至り、敵味方の殘黨も軍に倦んで、何時の間にか物別れとなつた頃は、彼等の京都に對する執著心も自ら薄らぎ、何れもその領地たる本國を指して引揚げ、皆その本國に落著いて容易に京都に出る事がなくなつた。

在國の風
落寞
密宗年表
ミツシユウネンピヤウ。
寄食
土佐の一條氏
一條房基。
需用地
坂本商人
坂本は今の滋賀縣滋賀郡坂本村。

彼等が多く在國の風となつた後の京都の落寞は、想像に難からぬところで、密宗年表に、「諸山寺各失衣食之助」と嘆じたのは、その打擊の尋常でなかつたことを示すもので、而かもこれは獨り社寺ばかりではないとせられてゐる。而してこの在國の風は、啻に彼等守護大名のみに止まらなかつた。多年打續いた戰亂の間に、莫大な軍資を得るに苦しんだ彼等は、公家乃至は社寺の領地の自國にあるものをも押領した結果、公家貴顯の人々も困窮の餘り、京都の在住を許されず、知るべを便つて諸大名の許に寄食した者も少からず、遂にはその地に土著して豪族となつた土佐の一條氏の如きもあつた。斯くの如くして京都の經濟界が蒙つた打擊は、果して如何であつたらうか。京都を無二の需用地として、江州米を賣買する坂本商人が京都に出でて賣買するに、市民離散して人なく、殆んど捨てる如くに賣買したといふではないか。需要供給の平衡

殖産興業
元和
後水尾天皇の御代の年號。
偃武
エンブ。天下が太平になること。
濫觴
ランシヤウ。ランジヤウ。物事のはじまり。
花見朔巳
史料編纂官。福島縣の人。明治十四年生。

を得ないことまた甚だしといふべしである。併しながら、近世初期に於て米穀・蔬菜の如き農産物で、而かも原料そのまゝに消費せられる物の多くが、丹波・播磨又は近江・美濃等から輸送せられる外は、大抵京都地方に産出するか、然らずんば原料は他國の産出に係るものであつても、たとへば大小の鐵器・銅器の如く、製産工業の發達は、幸にこれに加工して京都の名産として賣出したものが少くなかつたことは、さすがに京都の市場の盛んなものたることを示すものである。かういふ殖産興業が元和偃武以後、一朝にして突然起るものでないことは言ふまでもなく、必ずやその濫觴は室町時代乃至はその以前にあつたものと見るべき理由がある以上、戰國時代の衰微は一時の現象で、四海泰平に歸すると共に、再びもとの殷賑を回復した結果、各種の産業も起つて、洽く世の需要に應ずるに至つたと考へられる。

（花見朔巳）

衆美を聚む

エキス
藥品・食物等の有效成分を抽出せるもの。

幽婉

四明が嶽
比叡山の絶頂をいふ。

比良
滋賀縣滋賀郡。

一一　平安京

日本は世界の樂土なり、東亜のイタリーなり。　山川の風景行く所として佳ならざるなきが中に、殊に衆美を聚めたるを京都とす。京都附近の景は、日本のすべての景をエキスにしたるもの。一規模の雄大豪壯なるものは存せずと雖も、秀麗幽婉の形態は備へざるなし。　東に近く比叡、如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬・貴船・氷室・鷹が峰・高雄の山々波濤の如く、西に稍隔りて愛宕・小倉・龜山・嵐山・松尾より山崎に至りて地勢は窮まる。松柏の綠、色濃き中に、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織りこみたるあり。　一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日・夕日に照り映ゆる色の千變萬化なるぞおもしろき。　東の神樂が岡、北の船岡、西の雙が

子の日の遊
正月の子の日、野に出でて、小松を引きて千代を祝ひしこと。

八幡宮
石清水八幡宮。

大堰
桂河の上流の嵯峨・松尾の邊をいふ。

二川
桂・賀茂の二川をさす。

沈々

浩蕩

跌宕
テツタウ。

岡は、大和の畝傍・香具山・耳成の如く近く相竝びてあらねど、子の日の遊に小松引く樂みなど、いづれ劣らぬ所がら。　南に稍隔りて男山これに對し、國家鎭護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。

京の東端には賀茂川の流、紆（たす）の河合に高野の支流を集めて南に珠を碎き去り、西に桂河、大堰の激湍に清瀧を併せて、琴の音涼しくまた南に向ふ。　二川南に合し、更に淀の急流に流れこみて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるもの少しと雖も、一面よりいへば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。　地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出で入る白帆の、町の側を往來する眺なきかはりに、濁りて底の明かならざる河水を知らず。　京の水は、わけてアルカリ性の鑛物を含めるにや、晒す布をも、人の膚をも眞白にす。　海そのもの

は清けれど、捨てたる塵埃を更に岸にうち上ぐるに、藻の臭も添ひ、漁夫など居る所は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜しむべしと雖も、海なくして清き京都は益〻清きなり。

山紫水明

山紫水明の語は、よく京都の景色をいひあらはせり。何處の山水も、日中よりは朝夕の姿態のおもしろきは、水蒸氣の然らしむるところなるを知らば、三面を山にして土地濕潤に水分を含むこと殊に濃かなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明かなるべし。嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至れるを見る。疾風さと吹き、浪俄かに高く、黒雲奔りて魔の如く、見るがうちに重なり重なりて海を覆ふ。浪の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。浪か、雷か、世界はたゞ一暗黒の中に沒し去るかと疑はれて、凄じかり

黒雲奔りて魔の如し

き。此の如き壯絶なる景は、我が數年滯留中、遂に京都にては見ることを得ざりしところなり。されど下京より吉田に通ひたる朝な朝なの景色は、今もなほ彷彿として眼前にあるを覺ゆ。引きわたす霞に、三條の大橋の擬寶珠の、一つ〳〵彼方へ〳〵と淡くなりて、向うに寢たる東山は、あるかなきかの夢より未だ覺めやらず。吉田の岡に竝び立てる松は、墨繪の刷毛の濃く薄く、花賣る少女の姿は隱れて、聲ぞまづ朝靄を漏れくる。時雨の景色の、またよその國には見られぬさまよ。愛宕の峰を覆ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はら〳〵と面を撲つ。あはやと驚きもはてず、雲は走りて直ちに東山を包み、いつしかそれも霽れて、今は山科あたりの山巡りするなるべし。かゝる優しき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

（藤岡作太郎—國文學全史）

下京より云々　作者は嘗て第三高等學校教授たりき。

擬寶珠

寢たる東山　嵐雪の句、「蒲團著て寢たる姿や東山。」による。

あるかなきかの夢

山河襟帶

かぐや姫　竹取の翁が竹の中より得て養育せし女。

人ま　人の見ぬ間。

竹取の翁　野山に入りて竹を取ることを生業とせる老人。

なでふ　何といふの轉。

うましき世

一二　月の都

春の初めより、かぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、月の顔みるは忌む事と制しけれども、ともすれば人まには月を見て、いみじく泣き給ふ。ふづきの望の月に出で居て、切にもの思へるけしきなり。近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがり給ひけれども、この頃となりては、たゞ事にも侍らざめり。いみじくおぼし歎く事あるべし。よく〳〵見奉らせ給へ。」といふを聞きて、かぐや姫にいふやう、「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見給ふぞ。うましき世に。」といふ。かぐや姫、「月を見れば世の中心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。」といふ。かぐや姫のある處にいたりて見れば、なほ物思へるけしきなり。こ

あが佛　我が尊び大切にする者の義。かぐや姫をいふ。

夕闇　陰曆十六日より二十日までの稱。月の出遲くして夕方暗き意。

月のほど　宵のうちより月のある頃。こゝは八月に入りて日數を經過し、月の明るくなれる頃をいふ。

昔の契

れを見て、「あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。」といへば、「思ふこともなし。物なむ心細く覺ゆる。」といへば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、もの思すけしきはあるぞ。」といへば、「いかでか月を見ずにはあらむ。」とて、なほ月出づれば出で居つゝ歎き思へり。夕闇には物思はぬけしきなり。月のほどになりぬれば、なほ時々はうち歎き泣きなどす。これを、使ふ者ども、「猶もの思す事あるべし。」とさゝやけど、親を始めて何事とも知らず。

はづきの望ばかりの月に出で居て、かぐや姫、いといたく泣き給ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て、親どもも、「何事ぞ。」と問ひさわぐ。かぐや姫、泣く〳〵いふ、「さきぐ〳〵も申さむと思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まで過ぐし侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身は、此の國の人にもあらず、月の都の人なり。それを、昔の契なりけ

さらず　避くることを得ず。

のゝしる　大聲をあげて騷ぐ。

片時の間云々　現世と月の都との時間の標準の異るをいふ。

るによりてなむ、この世界にはまうで來りける。今は歸るべきになりにければ、この月の望に、かの本の國より迎に人々まうで來むずと。さらず罷りぬべければ、思し歎かむが悲しきことを、この春より思ひ歎き侍るなり。」といひて、いみじう泣く。翁「こはなでふ事を宣ふぞ。竹の中より見つけ聞えたりしかど、菜種の大きさおはせしを、我が丈だち竝ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か迎へ聞えむ。まさに許さむや。」といひて、「我こそ死なめ。」とて、泣きのゝしること、いと堪へ難げなり。かぐや姫の曰く、「月の都の人にて父母あり。片時の間とてかの國よりまうで來しかども、かくこの國には、あまたの年を經ぬるになむありける。かの國の父母の事も覺えず、ここにはかく久しく、遊び聞えてならひ奉れり。いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されど己が心ならず罷りなむとする。」といひて諸共にいみじう泣く。使はるゝ人々も、年頃ならひて、

竹取　竹取の翁。

少將　近衛府の官名。中將の次に位す。

六衛のつかさ　六衛府をいふ。卽ち左右の近衛・衛門・兵衛の六府。

嫗　竹取の翁の妻。

塗籠　土藏造りの藏。

立別れなむことを、心ばへなどあてやかに美しかりつることを見ならひて、戀しからむことの堪へがたく、湯水も飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。この事を帝聞し召して、竹取が家に御使つかはし給ふ。御使に竹取出で逢ひて、泣くこと限りなし。

かの望の日、司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人をさして、六衛のつかさ合せて、二千人の人を竹取が家に遣す。家に罷りて築地の上に千人、屋の上に千人、家の人々いと多かりけるに合せて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓箭を帶してをり。母屋の内には、女共を番にすゑて守らす。嫗、塗籠の内にかぐや姫を抱かへてをり。翁も塗籠の戸をさして戸口にをり。翁のいはく、「かばかり守る所に、天の人にもまけむや。」といひて、屋の上にをる人々にいはく、「つゆも、もの空にかけらば、ふと射殺し給へ。」守る人人のいはく、「かばかりして守る所に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺

したぐみ　準備。

子の時　夜の十二時。

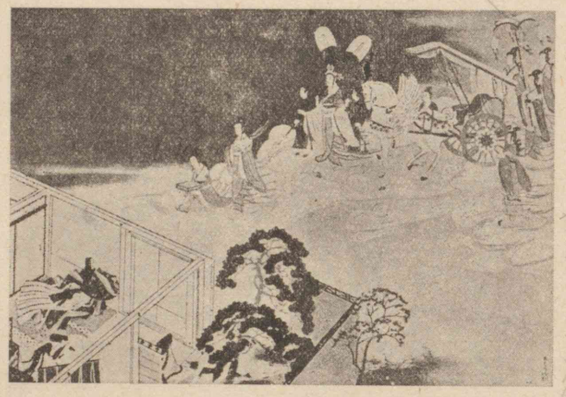
して外にさらさむと思ひ侍り。」といふ。翁これを聞きて、頼もしがりをり。これを聞きて、かぐや姫は、「さし籠めて守り戰ふべきしたぐみをしたりとも、あの國の人をえ戰はぬなり。弓箭して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來ば皆あきなむとす。相戰はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ。」翁のいふやう、「御迎に來む人をば、長き爪して眼をつかみつぶさむ。さが髪をとりてかなぐり落さむ。さが尻をかき出でて、こゝらのおほやけ人に見せて恥見せむ。」と腹立ちをり。

かゝる程に宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり晝のあかさにも過ぎて光りたり。望月のあかさを十合せたるばかりにて、ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乗りており來て、地より五尺ばかりあがりたる程に立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物に襲はるゝやうにて、相戰はむ心もな

羅蓋　薄絹を張りし天蓋。

造麻呂　竹取の翁の名。

かりけり。辛うじて思ひ起して、弓箭を取立てむとすれども、手に力もなくなりて、痿えかゞまりたる中に、心さかしき者、念じて射むとすれども、外ざまへいきければ、荒れも戰はで、心地たゞしれにしれて守りあへり。



かぐや姫の昇天　吉村忠夫筆

立てる人どもは、裝束のきよらなること物にも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋さしたり。その中に王と覺しき人、家に造麻呂まうでこ。」といふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に醉ひたる心地してうつぶしに伏せり。いはく、

「汝をさなき人、聊かなる功德をつくりけるによりて、汝が助にとて片時の程とて降ししを、そこらの年頃そこらの金たまひて、身をか

竹取物語　一卷。かぐや姫物語とも、また竹取の翁物語ともいふ。平安朝初期の成立。作者未詳。

へたるが如くなりにたり。　かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれがもとにしばしおはしつるなり。　罪の限り果てぬればかく迎ふるを、翁は泣き歎く、あたはぬことなり。　はや返し奉れ。」といふ。　翁答へて申す、「かぐや姫を養ひ奉ること、二十年あまりになりぬ。　片時と宣ふに怪しくなり侍りぬ。　また他處にかぐや姫と申す人ぞ、おはしますらむ。」といふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ。」と申せば、その返事はなくて、屋の上に飛ぶ車をよせて、「いざかぐや姫、穢き所にいかでか久しくおはせむ。」といふ。　立て籠めたる所の戸、卽ちたゞあきにあきぬ。　格子どもも人はなくしてあきぬ。　嫗抱きてゐたるかぐや姫外に出でぬ。　えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣きをり。

（竹取物語）

心づくし云々　古今和歌集よみ人知らずの歌に、木の間よりもり來る月のかげ見れば心づくしの秋はきにけり。」とあり。

關吹き越ゆる云云　續古今和歌集在原行平の歌に、「旅人は袂涼しくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風。」とあり。

枕をそばだてて　白氏文集に、「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看。」とあり。

一三　須磨の浦波

須磨には、いとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけむ浦波、夜々は、げにいと近く聞えて、又なくあはれなるものは、かゝる處の秋なりけり。　御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、一人目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ちくる心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりにけり。　琴を少し搔鳴し給へるが、我ながらいとすごう聞ゆれば、彈きさし給ひて、

戀ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらむ

とうたひ給へるに、人々おどろきて、めでたう覺ゆるに忍ばれで、あいなう起き居つゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。

あいなし　せんなし。

いみじくて　甚だ氣の毒で。

及ばぬ　心も詞も及ばぬ。

常則　飛鳥部常則。延喜・天曆二朝に仕へし畫師。繪に巧なりし由古今著聞集に見ゆ。

作繪　ツクリエ。墨繪に彩色すること。

前栽　センザイ。庭先の植込。

げにいかに思ふらむ、我が身ひとつにより、親兄弟かた時立離れがたく、程につけつゝ思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへるとおぼすに、いみじくて、いとかく思ひ沈む樣を、心細しと思ふらむと思せば、畫は何くれとたはぶれごとうち宣ひまぎらはし、徒然なるまゝに、いろ〳〵の紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍らしき樣なる唐の綾などに、さま〴〵の繪どもを畫きすさび給へる、屏風の面どもなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有樣を、遙かに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたゝずまひ、になく書き集め給へり。「此の頃の上手にすめる、千枝・常則などを召して、作繪仕うまつらせばや。」と、心もとながりあへり。懷かしうめでたき御有樣に、世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕うまつるを嬉しきことにて、四五人ばかりぞ、つと侍ひける。

前栽の花いろ〳〵咲き亂れ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊

紫苑色　シヲニイロ。薄紫色。

大殿の三位中將　源氏物語帚木の卷以後に出る頭の中將。源氏の北の方なりし故葵上の兄君。

一つ涙ぞ云々　後撰和歌集よみ人知らずの歌に、「うれしきも憂きも心は一つにてわかれぬものは涙なりけり。」とあり。

に出で給ひて、佇み給ふ御さまの、ゆゝしう清らなるに、處がらはましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣・帶、しどけなく打亂れ給へる御さまにて、「釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆるゝかによみ給へる、また世に知らずきこゆ。

年かへりて、日長くつれ〴〵なるに、植ゑし若木の櫻ほのかに咲きそめて、空の氣色うらゝかなるに、よろづの事思し出でられて、うち泣き給ふ折々おほかり。大殿の三位中將は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおぼえ重くてものし給へど、世の中いと哀れにあぢきなく、物の折ごとに戀しく覺え給へば、事のきこえありて、罪にあたるとも如何はせむと思しなりて、にはかにまうで給ふ。うち見るより、珍らしく嬉しきにも、一つ涙ぞこぼれける。住ひ給へるさま、言はむ方なく唐めきたり。處のさま、繪にかきた

ゆるし色　臣下の著用を禁じたる深紫・深緋などの所謂禁色以外の色。

彈碁　タギ。たんぎの略。互に石を彈きて勝負をする遊戯。

源氏物語　五十四帖。前四十帖は源氏の君を主人公として、その華やかなりし一生の榮華を敍し、後十帖（宇治十帖）は源氏の子薫の君を主人公として、その寂しき生活を描く。中間の四帖は源氏薨後の六條院の樣子を寫せり。一條天皇の頃書かれしもの。

らむ樣なるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから、珍らかにをかし。山賤めきて、ゆるし色の黄がちなるに、青鈍の狩衣、指貫うちやつれて、殊更に田舍びてもてなし給へるしも、いみじう見るに笑まれて清らなり。取り遣ひ給へる調度も、かりそめにしなして、御座所もあらはに見入れらる。碁・雙六の盤、調度、彈碁の具など、田舍わざにしなして、念珠の具、行ひ勤め給ひけりと見えたり。

物參れるなど、殊更處につけ、興ありてしなしたり。海士ども漁して、かひつ物もて參れるを、召し出でて御覽ず。浦に年經る樣など問はせ給ふに、さまざま安げなき身のうれへを申す。そこはかとなくさへづるも、心の行方は同じ事なるかなと、哀れに見給ふ。

（紫式部―源氏物語）

まいて　ましての音便。

つとめて　早朝。

つきづきし　相應せること。

炭櫃　スビツ。すみびつの略。方形の火鉢。

火桶　圓火鉢。

一四　春は曙

一　春は曙

春は曙。やうやうしろくなりゆく山際、少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏はよる。月の頃は更なり、闇もなほ、螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋はゆふぐれ。ゆふ日花やかにさして、山際いと近くなりたるに、烏の寢所へゆくとて、三つ四つ二つなど、飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などの列ねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もて渡るも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃・火桶の火も、白き灰がちになりぬる

うつくし
可愛らし。
ふり
瓜。
ねずなき
へにつけて
綜緒につけての意。綜緒は足緒のこと。
および
尼にそぎたる
頸あたりにて髪を切りたるをいふ。
白う云々
袴の白き紐の、肩のあたりに結ばれたるが目立つをいふ。
殿上童
摂關の子弟にして、元服以前に殿上に奉仕するもの。

はわろし。

二　うつくしきもの

うつくしきもの。ふりにかきたる乳兒の顔。雀の子のねずなきするにをどりくる。又、へにつけて居ゑたれば、親雀の蟲などもて來てくゝむる、いとらうたし。三つばかりなる乳兒の、急ぎて這ひくる道に、いと小さき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびに捉へて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたる乳兒の、目に髪のおほひたるを、掻きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。襷がけに結ひたる腰のかみの、白うをかしげなるも、見るにうつくし。大きにはあらぬ殿上童の、ざうぞき立てられてありくもうつくし。

をかしげなる乳兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいと小さ

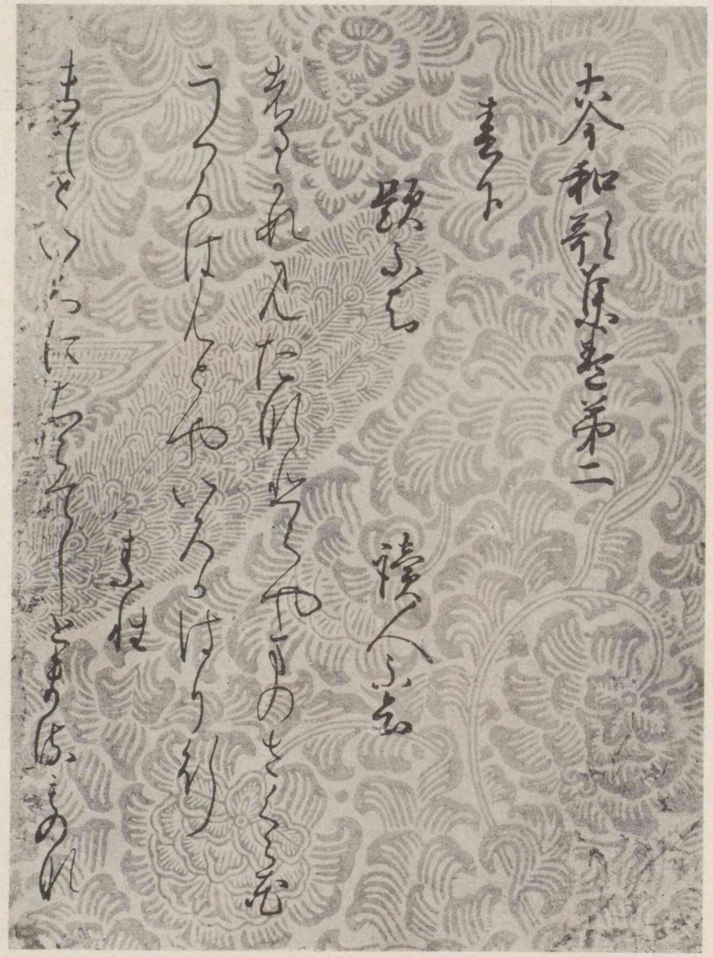
二藍の羅
二藍とは、今の薄紫に似たり。藍と紅花とにて染むる故にいふ。
舍利の壺
佛骨を入るゝ壺。
汗衫
カザミ。童女の上衣。
あまづら
甘葛煎のこと。甘葛は蔓草にして、その煎汁を以て食物に甘味を附くる材料とす。

きを、池より取りあげて見る。葵の小さきもいとうつくし。

何も〳〵小さき物は、いとうつくし。いみじう肥えたる乳兒の、二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍の羅など、衣長くて、襷あげたるが這ひ出でくるもいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文讀みたる、いとうつくし。鷄の雛の足高に、白うをかしげに、衣短なるさまして、ひよ〳〵とかしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親の許に連れ立ちありく、見るもうつくし。かりの子。舍利の壺。瞿麥の花。

三　あてなるもの

あてなるもの。薄色に白襲の汗衫。かりの子。削氷のあまづらに入りて、新しきかなまりに入りたる。すゐさうの數珠。藤の花。梅の花に雪の降りたる。いみじう美しき乳兒の、覆盆子食ひたる。



元永本古今和歌集

四　降るものは

降るものは、雪・霰。霙は憎けれど、雪の眞白にてまじりたるを、をかし。雪は檜皮葺、いとめでたし。少し消え方になりたるほど、又、いと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黑う眞白に見えたるいとをかし。時雨・霰は板屋。霜も板屋・庭。

五　香爐峰の雪

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子參らせて、炭櫃に火おこして、物語などして集り侍らふに、「少納言よ、香爐峰の雪はいかならむ。」と仰せられければ、御格子上げさせて、御簾高く卷き上げたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さる事は知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ。「なほこの宮の人には、さるべきなめり。」といふ。

（清少納言―枕草子）

香爐峰の云々
白樂天の詩句に、「遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看」とあり。香爐峰は支那江西省九江縣の西南、廬山の北にあり。
枕草子
清少納言の隨筆。

春日野　奈良縣奈良市春日神社境内一帶の稱。春日山の裾野。
飛火の野　春日野の一部。
染殿の后　藤原良房の女明子。文德天皇の皇后。
前のおほきおほいまうち君　前太政大臣藤原良房。貞觀十四年歿。年六十九。（一四六四―一五三二）
素性法師　俗名良岑玄利。僧正遍昭の子。平安朝時代の歌人。歿年未詳。

一五　古今と新古今

一　春日野

題しらず　よみ人しらず

春日野の飛火の野守出でて見よ今いく日ありて若菜つみてむ

染殿の后のお前に花瓶に櫻の花をさゝせ給へるを見てよめる　前のおほきおほいまうち君

年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし

花ざかりに京を見やりてよめる　素性法師

紀友則
紀貫之の甥。平安朝時代の歌人。延喜五年歿。年六十一。（一五〇五―一五六五）

志賀の山ごえ
京都の北白河（京都市左京區）より如意が嶽の麓を越え、近江の志賀（滋賀縣滋賀郡滋賀村）へ出づる道。

あづさ弓はるにかゝる枕詞。

藤原敏行
平安朝時代の歌人。書をも能くす。延喜七年（一五六七）歿。一説に延喜元年（一一）

見わたせば柳さくらをこきまぜて都ぞはるのにしきなりける　紀友則

さくらの花のちるをよめる

久かたのひかりのどけきはるの日にしづごころなく花のちるらむ　志賀の山ごえに女の多くあへりけるによみて遣しける　貫之

あづさ弓はるの山べを越えくればみちもさりあへず花ぞちりける　秋立つ日よめる　藤原敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる　題しらず　よみ人しらず

伊勢
平安朝時代の歌人。一説に天慶二年（一五九九）歿。

長岡
京都府乙訓郡向日町附近一帶の古稱。

きのふこそさ苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風のふく　家を賣りてよめる　伊勢

あすか川淵にもあらぬわが宿もせにかはり行くものにぞありける　業平朝臣の母のみこ長岡に住み侍りける時に業平宮づかへすとて時時も得まかりとぶらはず侍りければ母のみこのもとよりとみの事とて文をもてまうできたりあけて見れば言葉はなくてありける歌

老いぬればさらぬわかれのありといへばいよ〳〵見まく

藤原秀能
藤原秀郷の後胤。鎌倉時代の歌人。仁治元年歿。年五十七。（一八四五—一九〇一）

藤原家隆
鎌倉時代の歌人。嘉禎三年歿。年八十。（一八一八—一八九七）

ほしき君かな　　業平朝臣
かへし
世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もとなげく人の子の爲

二夕月夜

詩をつくらせて歌に合はせ侍りし
に水郷春望といふ事を　　藤原秀能
ゆふ月夜しほみちくらしなには江の葦のわか葉をこゆる白波

和歌所にてをのこども歌よみ侍り
しにゆふべの鹿といふ事を　　藤原家隆朝臣
下もみぢかつ散る山のゆふ時雨ぬれてやひとり鹿の鳴くらむ

式子内親王
後白河天皇の皇女。建仁元年（一八六一）薨。

源信明
源公忠の子。陸奥守たり。天祿元年（一六三〇）歿。

太上天皇
後鳥羽天皇。延應元年崩御。御年六十。（一八四〇—一八九九）

百首の歌奉りし時秋の歌　　式子内親王
桐の葉もふみわけがたくなりにけりかならず人を待つとならねど

題しらず　　源信明朝臣
ほのぐと有明の月の月影にもみぢふきおろす山おろしの風

旅のうたとてよめる　　藤原定家朝臣
たび人のそでふきかへす秋かぜにゆふ日さびしきやまのかけはし

住吉の歌合に山を　　太上天皇
おく山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

大原　京都府愛宕郡大原村。
法皇　後白河法皇。建久三年（一八五二）崩御。
文治二年（一八四六）　建禮門院　御名は徳子。平清盛の次女。高倉天皇の中宮。安徳天皇の御母。建保元年崩御。御年五十九。（一八一五―一八七三）
北祭　賀茂の祭をいふ。陰暦四月中第二の酉の日に行はる。
花山院　大納言兼家。土御門　權中納言源通親。
鞍馬　京都府愛宕郡にあり。
清原深養父　平安朝初期の歌人。

一六　大原御幸

法皇は、文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御住居御覽ぜまほしう思し召されけれども、二月・三月の程は、嵐烈しう、餘寒もいまだ盡きず、峰の白雪消えやらで、谷のつらゝも打解けず。かくて春過ぎ、夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には、德大寺・花山院・土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通の御幸なりければ、かの清原深養父が補陀落寺、小野の皇太后宮の舊跡叡覽あつて、それより御輿にぞ召されける。遠山に懸る白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるる。頃は四月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を分け入らせ給ふに、はじめたる御幸なれば、御覽じなれたる方もなく、

補陀落寺　京都府愛宕郡大原附近にありきといふ。
小野の皇太后宮　御名歡子。後冷泉天皇の皇后。關白藤原教通の女。
寂光院　京都府愛宕郡大原村にあり。聖德太子の開基。よしあるさま
池水に云々　千載和歌集に出づ。
綠蘿の垣　綠のつたかづらの生ひ茂れる垣。
翠黛の山　みどりの眉ずみの如き山。

人跡絶えたる程も思し召し知られて哀れなり。

西の山の麓に一宇の御堂あり、すなはち寂光院これなり。古う造りなせる泉水・木立、よしあるさまの所なり。甍破れては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燈を掲ぐとも、かやうの處をや申すべき。庭の若草しげりあひ、青柳糸を亂りつゝ、池の浮草波にただよひ、錦を晒すかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遲櫻、初花よりも珍らしく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶間より、山郭公の一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを叡覽あつて、かくぞ遊ばされける。

池水にみぎはのさくらちりしきて波の花こそさかりなりけれ

ふりにける岩の絶間より落ち來る水の音さへ、ゆゑびよしある處なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及び難し。さて女

瓢簞屢〻云々
和漢朗詠集に、「瓢簞屢〻空し、草滋し顔淵之巷、藜藿深鎖、雨濕ふ原憲之樞。」とあるによる。

顔淵
孔子の弟子。

原憲
支那、魯の國の賢人。

院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦・蕣這ひかゝり、しのぶ交りの忘草、瓢簞屢空し、草、顔淵が巷にしげく、藜藿深く鎖せり、雨、原憲が樞を濕す。」ともいひつべし。 杉のふき目もまばらにて、時雨の霜もおく露も、洩る月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけり。 後は山、前は野邊、いさゝ小笹に風さわぎ、世にたゝぬ身のならひとて、うきふし繁き竹柱、都の方のおとづれは、間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとては、峰に木傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれならでは、まさ木のかづら青つゞら、くる人稀なる處なり。

法皇、「人やある、人やある。」と召されけれども、御應へ申す者もなし。やゝあつて、老い衰へたる尼一人參りたり。「女院は何處へ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「此の上の山へ花摘みに入らせ給ひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習といひながら、さやうの事に仕へまつ

五戒・十善の御果報
天子の御果報を云ふ。

五戒
佛教にていふ俗人の持つべき五つの制戒。即ち不殺・生戒・不偸盜・戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒。

十善
十惡（殺生・偸盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・慳貪・瞋恚・邪見）を犯さぬを十善といふ。

捨身の行
因果經
四卷。因果應報の例をあげて教訓せしもの。

伽耶城
其の位置に二說あり。一說には摩揭陀國にありと云ひ、一說には迦維羅衛國にありと云ふ。

る人もなきにや、御いたはしうこそ。」と、仰せければ、此の尼申しけるは、「五戒・十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。 捨身の行に、なじかは御身を惜しませ給ひ候べき。 因果經には、『過去の因を知らむと欲せば、其の現在の果を見よ。 未來の果を知らむと欲せば、其の現在の因を見よ。』と說かれたり。 過去・未來の因果をかねて悟らせ給ひなば、つや〳〵御歎あるべからず。 昔、悉達太子は、十九にて伽耶城を出でて、檀特山の麓にて、木の葉を連ねて肌を匿し、峰に上つて薪を採り、谷に下つて水を掬び、難行苦行の功によつて、終に成道正覺し給ひき。」とぞ申しける。

此の尼の有樣を御覽ずれば、身には絹・布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。 あの有樣にても、かやうの事申す不思議さよと思し召して、「抑〻汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、此の尼、さめざめと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。 やゝあつて涙をお

故少納言入道信西　藤原通憲。鳥羽。崇德・近衞の三天皇の朝に歷事せり。平治の亂の折殺さる。

阿波內侍　傳未詳。

紀伊二位　名は朝子。信西の妻。

さへて、「申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波內侍と申すものにて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身のおとろへぬる程思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。」とて、袖を顏に押當てて忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇、「げにも汝は阿波內侍にこそあなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思し召せ。」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿・殿上人も、不思議の事申

大原御幸（一）

來迎の三尊　彌陀・觀音・勢至の三尊。

中尊　三尊の中に立たせ給ふ阿彌陀佛。

普賢　普賢菩薩。

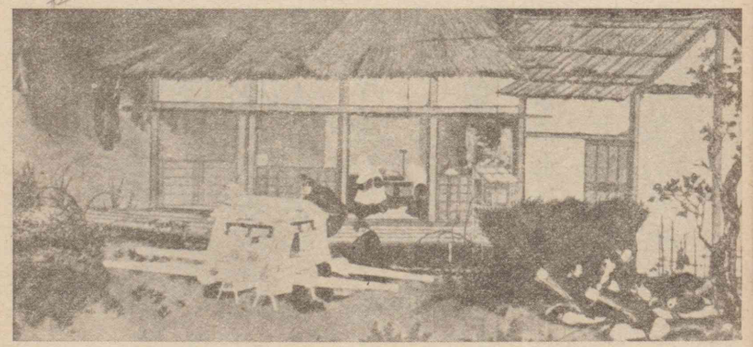
善導和尚　唐の高僧。淨土教を興し專心念佛をすゝめたり。永隆二年歿。年六十九（西曆六一三―六八一）

先帝　安德天皇。第八十一代。

八軸の妙文　法華經のこと。

す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、各感じあはれける。

さて、かなたこなたを叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつゝ、外面の小田も水越えて、鳴立つひまも見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には、五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の匂にひきかへて、香の烟ぞ立ちのぼ



大原御幸（二）　下村觀山筆

淨名居士
維摩詰をさす。釋迦と同時代の人。

定基
法名寂昭。長元七年、支那宋にて客死す。年七十三。（一六二二―一六九四）

清涼山
支那山西省にあり。一名五臺山とも云ふ。

る。かの淨名居士の方丈の室の内に、三萬二千の床を竝べ、十方の諸佛を請じ給ひけむも、かくやとぞ覺えける。障子には、諸經の要文ども色紙に書いて、所々におされたり。其の中に、大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけむ、「笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上。聖衆來迎す落日の前。」とも書かれたり。少しひきのけて、女院の御歌と思しくて、

おもひきや深山の奥にすまひして雲居の月をよそに見むとは

さて、かたはらを叡覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、麻の御衣、紙の御衾などかけられたり。さしも本朝・漢土の妙なるたぐひ數を盡し、綾羅錦繡の裝も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、まのあたり見奉りし事ども、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。

懸路

大納言典侍の局
平重衡の妻。典侍は官名。

閼伽の水
閼伽は梵語。佛に奉る水のこと。

やゝあつて、上の山より、濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩の懸路を傳ひつゝ、おり煩ひたる様なりけり。法皇、「あれはいかなる者ぞ。」と仰せければ、老尼涙を押へて、「花筐臂にかけ、岩躑躅とり具して持たせ給ひて候は、女院にてわたらせ給ひ候。爪木に蕨折添へて持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言典侍の局。」と、申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿・殿上人も、皆袖をぞ濡されける。女院は世を厭ふ御習とはいひながら、今かゝる有様を見え參らせむずらむ恥づかしさよ、消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。

宵々毎の閼伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに、曉おきの袖の上、山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけむ、山へも返らせ給はず、又御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせまし〳〵たる所に、内侍の尼參りつゝ、花筐をば賜はりけり。「世を厭ふ御習、何か苦し

一念の窓の前云云　一心に佛を念ずることによりて佛に救ひ取られんことを豫期する意。

十念の柴の樞云云　阿彌陀佛の名號を十度唱ふることによりて、諸佛の來迎を待つ意。樞は黑木の扉。

う候べき。早々御見參あつて、還御なし參らせ候へ。」と申されければ、女院御涙を押へて、御庵室に入らせおはします。「一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には、聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思ひの外の御幸かな。」とて、見參ありけり。

法皇、この御ありさまを叡覽あつて、仰せなりけるは、「さるにても誰かことひ參らする。何事につけても、さこそ古をのみこそ思し召し出づらめ。」と仰せければ、女院、「いづかたよりもおとづるゝ事も候はず。信隆・隆房の卿の北の方より、たえ〳〵申し送る事こそ候へ。その昔、あの人どものはぐくみにてあるべしとは、つゆも思し召しよらざりしものを。」とて、御涙を流させ給へば、つき參らせたる女房たちも、みな袖をぞぬらされける。

（平家物語）

承久三年　一八八一年。
帝　順德天皇。
春宮　仲恭天皇。
御兄の院　土御門上皇。
父帝　後鳥羽上皇。
家實　近衛基通の子。攝政・關白となる。仁治三年歿。年六十四。（一八三九―一九〇二）
道家　藤原良經の子。攝政・關白となる。建長四年歿。年六十。（一八五三―一九一二）
あづまの若君　藤原頼經。
院　後鳥羽上皇。
光季　佐藤朝光の子。

一七　新島守

承久三年四月二十日、帝おりさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに讓り申させ給ふ。近頃皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日、院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中院と申し、父帝をば本院とぞ聞えさする。この程は家實の大臣關白にておはしつれど、御讓位の時、左大臣道家の大臣、攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。

さても院のおぼし構ふること、忍ぶとすれど、やう〳〵漏れ聞えて、東ざまにもその心遣ひすべかめり。あづまの代官にて、伊賀の判官光季といふ者あり。かつ〳〵彼を御勘じの由仰せられければ、御方に參るつは者ども押寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切

わが身
北條義時。北條時政の子、第二代の執權。

時房
北條義時の弟。義時の歿後、執權連署となり、修理大夫に任ず。仁治元年歿。年六十六。(一八三五—一九〇〇)

泰時
義時の長子。北條氏第三代の執權。仁治三年歿。年六十。(一八四三—一九〇二)

りてけり。先づいとめでたしとぞ院は思し召しける。

あづまにもいみじうあわて騒ぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻め來りなむ時に、はかなきさまにて屍を曝さじ、おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。泰時を前に据ゑていふやう、「おのれをこのたび都にまゐらすることは、思ふところ多し。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろを見えなむには、親の顏また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども義時、君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横さまの死にをせむことはあるべからず。心を猛く思へ。おのれ打勝つものならば、二たびこの足柄箱根山は越ゆべし。」など、泣く〳〵いひ聞かす。誠にしかなり、また親の顏拜

軍のあるべきやう

鳳輦

とばかり

まむこともいと危ふしと思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに、今や限りと哀れに心細げなり。

かくて打出でぬる又の日、思ひかけぬ程に、泰時たゞ一人、鞭を揚げて馳せきたり。父胸うち騒ぎて、「いかに。」と問ふに、「軍のあるべきやう、大かたの掟などは、仰せの如くその心を得侍りぬ。若し道のほとりにも、圖らざるに、忝く鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らむに參りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからむ。この一ことを尋ね申さむとて、ひとり馳せ侍りき。」といふ。義時、とばかり打案じて、「かしこくも問へるをのこかな。そのことなり、まさに君の御輿に向ひて弓をひくことはいかゞあらむ。さばかりの時は、兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましながら、軍兵を賜はせば、命を捨てて千人が一人になるまでも戰ふ

勢多　滋賀縣栗太郡。
公經　藤原氏。賴經の祖父。西園寺家の祖。
能保　藤原道重の子。建久九年歿。年五十一。（一八〇—一八五八）
故大將　源賴朝のこと。
義朝—女—賴朝
一條能保—女—九條道家
公經—女—
將軍賴經
七條院　藤原殖子。後鳥羽天皇の御母。
修明門院　藤原重子。順德天皇の御母。

べし。」と、いひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

都にもおぼし設けつる事なれば、ものゝふども召集へ、宇治・勢多の橋も引かせて、敵を防ぐべき用意、心ことなり。公經の大將ひとりのみなむ、御孫のこともさる事にて、北の方一條中納言能保といふ人の女なり、その母北の方は、故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕き事と、あぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信・尾張中納言清經・中御門大納言宗家、又修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎ〳〵あまた聞ゆれど、さのみはしるしがたし。軍にまじりたつ人々、この外の上達部にも殿上人にもあまたありき。中院は、飽かで位をすべり給ひしより、言に出でてこそ物し給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御騒ぎにも殊に交らひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづ軍の事なども、掟

龍馬（駿馬）　すぐれて善き馬をいふ。
君　後鳥羽天皇。
遠き世界

て仰せられたり。

いつの年よりも、五月雨はれ間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲り騒ぎて、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻めのぼる武者どもも、あやしく惱めり。かかれども、遂に都に近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出でたつ。その勢六萬餘騎とかや、宇治・勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎ滿ちたり。いかゞあらむと君も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人々も、誠のきはになりぬれば、いと心あわただしく、色を失ひたるさまども、賴もしげなし。六月十日餘りにや、幾何の戰だになくて、遂に御方のいくさ敗れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下たゞ物にぞ當り惑ふ。

二人の大將　奉時・時房。

鳥羽殿　今の京都市鳥羽にありし白河天皇の山莊。

網代車　網代にて張りたる牛車。

ものにもがなや云々　河海抄に、「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらの我が身と思はむ」とあり。

信實　藤原隆信の子。左京權大夫に至る。文永二年歿、年八十九（一八三七—一九二五）。

土佐院　土御門天皇。第八十三代。

佐渡院　順德天皇。第十四代。

あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はからひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院・宮々、處々におぼし惑ふこと更なり。本院は隱岐の國におはしますべければ、先づ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや。」と、おぼさるゝも甲斐なし。その日、やがて御ぐしおろす。御年四そぢに一つ二つや餘らせ給ふらむ。まだいと惜しかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し描かせらる。七條院に獻らせ給はむとなり。かくて、同じき十三日に、御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじういかなりける代々の報いにかと恨めし。

六つにて位に卽き給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下には同じ事なりしかば、

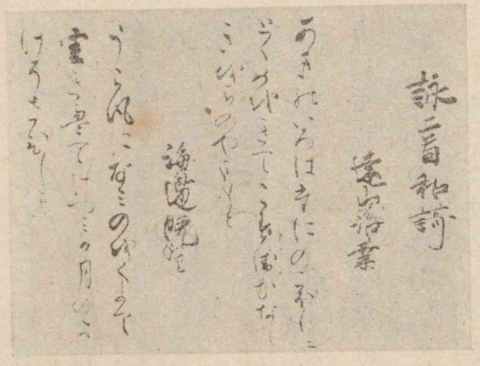
詠二首和謌　遠山蔭葉

あきのいろはたにのこほりにとゝめをきてこすゑむなしきをちのやまさと

海邊晩望

うら風になみのをぐまて雲きえてけふみか月のかけそさひしき

津の國の云々　後拾遺和歌集、和泉式部の歌に、「津の國のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ蘆の八重葺。」とあるによる。



後鳥羽天皇宸翰

すべて三十六年がほど、この國のあるじとして、萬機の政を御心一つに治め、百の官を從へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御有樣にて、遠きを憐み、近きを撫で給ふ御惠、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやのひまなき政を聞し召すにも、難波の葦の亂れざらむことをおぼしき。藐姑射の山の峰の松も、やう〳〵枝を連ねて、千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても、空ゆく月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、ありて由なき一ふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苫屋に軒を竝べて、おのづから言問ふものと

ては、浦に釣する海人小舟、鹽燒く煙のなびく方をも、わが故郷のしるべかとばかり眺め過させ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まして何時をはてとか廻り逢ふべき限りだになく、雲の浪煙の浪の幾重とも知らぬ境に、世を過し給ふべき御樣ども、口惜しといふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ、里遠き島の中なり。海づらよりは少し引入りて、山陰に片添へて、大きやかなる巖の欹てるをたよりにて、松の柱に蘆葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに「柴のいほりのたゞしばし。」と、假初に見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀨殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はるゝ〳〵と見やらるゝ海の眺望、二千里の外も殘りなき心地する、今更めきたり。汐風のいとこち

欹てる　ソバダてる。

柴のいほり云々　新古今和歌集、西行法師の歌に、「いづくにも住まれずばたゞ住まであらむ柴の庵のしばしなる世に。」とあるによる。

水無瀨殿　後鳥羽上皇の造らせられし離宮。今の大阪府三島郡島本村廣瀨に在りき。

二千里の外云々　白樂天の詩に、「三五夜中新月色、二千里外故人心。」とあるによる。

たく吹きくるを聞し召して、

われこそは新島守よおきの海のあらきなみ風こゝろして

吹け

同じ世にまたすみの江の月や見むけふこそよそにおきの

島守

年もかへりぬ。所々浦々、哀なる事をのみおぼし歎く。隱岐には、浦よりをちの、はるゝ〳〵と霞み渡れる空を眺め入りて、過ぎにし方、かきつくしおもほし出づるに、行方なき御涙のみぞとゞまらぬ。

羨し長き日影の春にあひて汐くむあまも袖やほすらむ

夏になりて、かやぶきの軒端に、五月雨の雫いと所せきも、御覽じなれぬ御こゝちに、さまかはりて珍しくおぼさる。

あやめふくかやが軒端に風すぎてしどろに落つるむら雨

の露　（增鏡）

折ふし　季節。

物のあはれ

けしきだつ

一八　季節の興趣

一　折ふしの移りかはり

折ふしの移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ」と、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどかなる日かげに、垣ねの草萌え出づる頃より、やゝ春深く霞み渡りて、花もやう〳〵けしきだつ程こそあれ、折しも雨風うち續きて、心あわたゞしく散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞなやまし。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古のことも立ちかへり戀しう思ひ出でらるる。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

灌佛　四月八日。釋迦の誕生日の法會。

祭　賀茂の祭。四月の中の酉の日。現今は五月十五日に擧行せらる。

菖蒲葺く　五月五日の節句に、毒氣を退くる意味にて家々の軒に菖蒲を挿すことをいふ。

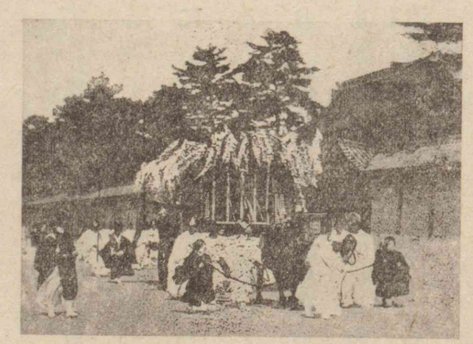
六月祓　夏祓・名越祓ともいふ。六月の晦日に行ふ。

棚機祭る云々　七月七日の星祭をいふ。

わさ田

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに茂りゆく程こそ、世のあはれも、人の戀しさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鷄の叩くなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈りほすなどとりあつめたる事は秋のみぞ多かる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じこと又今更にいはじとにもあ



賀茂祭

あぢきなきすさび

遣水
細き流を庭に堰き入れて流したるもの。

御佛名
十二月十九日より三日間宮中にて行はるゝ佛事。

荷前の使
毎年朝廷に於て十二月の吉日を選び、諸國より奉る貢穀の荷の初穂を諸陵墓に奉らる。

らず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝ業なれば、筆にまかせつゝあぢきなきすさびにて、掻いやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。秋の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置ける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名・荷前の使立つなどぞ、あはれにやむごとなき。公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて、催し行はるゝさまぞいみじきや。追儺より四方拜につゞくこそおもしろけれ。

つごもりの夜いたう暗きに、松どもともして、夜半過ぐるまで人の門たゝき走りありきて、何事にかあらむ、ことゞしくのゝしり

魂祭
もと七月十四日と十二月晦日との二回に行はれしが、此の頃已に七月一回になれり。

雨にむかひて云云
和漢朗詠集、源順の、「對雨戀月序」といふ辭句より取りしものなるべし。

たれこめて云々
古今和歌集、藤原因香の歌に、「たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり。」とあり。

て、足を空にまどふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。亡き人の來る夜とて、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方には、なほすることにてありしこそあはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

二　花はさかりに

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌のことばがきにも、花見にまかれりけるに、はやく散り

かたくななる人
下品にしてもののわからぬ人。

心深う
情趣深く。

椎柴
椎の木のむれ立てるをいふ。

心あらむ友

過ぎにければ」とも、「さはることありてまからで」なども書けるは、花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くをしたふならひは、さることなれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などはいふめる。

よろづのことも、はじめ終りこそをかしけれ。望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴・しらかしなどのぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしうおぼゆれ。

すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立去らでも、月の夜はねやの中ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

色こく

あからむ

祭
賀茂の祭。

見ごと
見るべきこと、すなはち祭の行列などをさしていふ。

桟敷
サジキ。見物のために高く造れる床。

よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢより、立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大きなる枝、こゝろなく折取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおり立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごといとおそし。そのほどは桟敷不用なり。」とて、奥なる屋にて酒飲み、ものくひ、圍碁・雙六など遊びて、桟敷には人を置きたれば、「渡りさぶらふ。」といふ時に、おの〳〵肝つぶるゝやうに、爭ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾はり出でて、押しあひつゝ、ひとことも見もらさじとまもりて、「とあり、かゝり。」と、ものごとにいひて、渡り過ぎぬれば、「また渡らむまで。」といひて下りぬ。たゞものをのみ見むとするなるべし。

ゆゝしげなる

わりなく

葵かけわたして　賀茂の祭には、簾や柱に葵をかくるを以て云ふ。

牛飼　牛車の牛を使役する身分ひくき者。

らうがはしさ　混雑せるさま。

都の人のゆゝしげなるは、ねぶりていとも見ず。若く末々なるは、宮づかへに立ちゐ、人のうしろにさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。

何となく葵かけわたしてなまめかしきに、明けはなれぬほど、しのびて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなど思ひ寄すれば、牛飼・下部などの見知れるもあり、をかしくも、きら〳〵しくも、さまざまに行きかふ、見るもつれ〴〵ならず。暮るゝほどには、立てならべつる車ども、所なく竝みゐつる人も、いづ方へ行きつらむ、程なく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾たゝみもとり拂ひ、目の前にさびしげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。

（吉田兼好―徒然草）

風早の云々　萬葉集に「風早の三保の浦曲を漕ぐ船の船人さわぐ浪立つらしも」とあり。

三保の浦　靜岡縣、清水灣の一稱。

萬里の好山云々　詩人玉屑陳文惠の詩に、「千里ノ好山雲乍斂（マツリ）一樓明月雨初晴（ナラル）」とあり。

忘れめや云々　續古今和歌集、中務卿親王の御歌に「忘れずよ清見が關の浪間よりかすみて見えし三保の浦松」とあり。

清見潟　靜岡縣庶原郡。浮見崎と三保崎との間なる海灣を指す。

風向と云々　拾葉抄に「風向ふ雲の浮浪立つと見て釣せぬ先に歸る舟人」とあり。

一九　羽衣

シテ　天人
ワキ　白龍
ワキツレ　漁夫

ワキ・ワキツレ一聲　風早の三保の浦わを漕ぐ船の、浦人騒ぐ浪路かな。

ワキサシ　これは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。

ワキ・ワキツレ　萬里の好山に雲忽ちに起り、一樓の明月に雨始めて晴れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、波立ちつゞく朝霞、月も殘りの天の原、及びなき身のながめにも、心空なる景色かな。

ワキ・ワキツレ下歌　忘れめや、山路をわけて清見潟、遙かに三保の松原に、立ち連れいざや通はむ。

上歌　風向ふ雲の浮波立つと見て、釣せで人や歸るらむ。待て暫し、春ならば吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。波は音なき朝な

いかさま、

末世の奇特
釋迦が入滅して佛法の衰へたる當代に珍らしき靈妙なる奇蹟。

ぎに、釣人多き小舟かな。釣人多き小舟かな。ワキ われ三保の松原に上り、浦の景色を眺むる處に、虚空に花降り音樂聞え、靈香四方に薫ず。これたゞごとと思はぬ處に、これなる松に、美しき衣懸れり。寄りて見れば、色香妙にして、常の衣にあらず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ なう、その衣は此方のにて候。何しに召され候ぞ。ワキ これは拾ひたる衣にて候程に、取りて歸り候よ。シテ それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとの如くに置き給へ。

ワキ そもこの衣の御主とは、さては天人にましますかや。さもあらば、末世の奇特に留め置き、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ 悲しやな、羽衣なくては飛行の道も絶え、天上に歸らむ事も叶ふまじ。さりとては返したび給へ。ワキ 此の御言葉

天人の五衰
天人の命の終る時に現れる五種の衰相。

天の原云々
丹後國風土記に、「天の原ふりさけ見れば霞立ち家路まどひて行方知らずも。」とあり。

を聞くよりも、いよ〳〵白龍力を得、もとよりこの身は心なき、天の羽衣とり隠し叶ふまじとて立ちのけば、シテ いまはさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、上らむとすれば衣なし。

ワキ 地に又住めば下界なり。シテ とやあらむ、かくやあらむと悲しめど、ワキ 白龍衣を返さねば、シテ 力及ばず。ワキ せんかたも、地 涙の露の玉鬘、かざしの花もしを〳〵と、天人の五衰も目の前に見えてあさましや。シテ 天の原ふりさけ見れば霞立つ、雲路まどひて行方知らずも。地下歌 住み馴れし、空にいつしか行く雲の、羨しきけしきかな。上歌

羽衣

迦陵頻伽　ガリョウビンガ。極樂淨土に住むといふ鳥の名。

霓裳羽衣の曲　唐樂。玉樹後庭花の別名。

迦陵頻伽の馴れ〳〵し、聲今更に僅かなる雁がねの歸り行く、天路を聞けば懷かしや。千鳥・鷗の沖つ波、行くか歸るか春風の、空に吹くまで懷かしや。空に吹くまで懷かしや。ワキ いかに申し候。御姿を見奉れば、餘りに、御痛はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。シテ あら嬉しや。此方へ給はり候へ。ワキ 暫く。承り及びたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ 嬉しや、さては天上に歸らむ事を得たり。この悅びにとてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮を廻らす舞曲あり。唯今ここにて奏しつゝ、世の憂き人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとては先づ返し給へ。ワキ いや、此の衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にやあがり給ふべき。シテ いや、疑は人間にあり。天に僞なきものを。ワキ あら恥づかしやさらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ 嬢子（をとめ）は衣を著しつゝ、霓裳羽衣の

東遊　神事等に奏する舞曲の名。

駿河舞　駿河の國の風俗歌に合はせて舞ふ舞。

二神　伊邪那岐命・伊邪那美命。

春霞云々　後撰和歌集、紀貫之の歌に「春霞たなびきにけり久方の月の桂の花や咲くらむ」とあり。

天津風云々　古今和歌集、良岑宗貞の歌に、「天つ風雲の通路吹きとぢよをとめの姿しばしとゞめむ」とあり。

曲をなし、天の羽衣風に和し、シテ 雨に潤ほふ花の袖、ワキ 一曲を奏で、シテ 舞ふとかや。

地 東遊の駿河舞、東遊の駿河舞、此の時や始めなるらむ。クリ地 それ久方の天といつぱ、二神出世の古、十方世界を定めしに、空は限りもなければとて、久方の空とは名づけたり。シテ・サシ 然るに、月宮殿の有樣、玉斧の修理とこしなへにして、地 白衣・黑衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々の天嬢子、奉仕を定め役をなす。シテ 我も數ある天嬢子、地 月の桂の身を分けて、假に東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。クセ地 春霞たなびきにけり久かたの、月の桂の花や咲く。げに花かづら色めくは、春のしるしかや。面白や天ならで、こゝも妙なり天つ風、雲の通ひ路吹きとぢよ。嬢子の姿暫し留まりて、この松原の春の色を三保が崎、月清見潟富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ波も松風も、のどかなる浦の有樣。その上天地は、

君が代云々　拾遺和歌集、よみ人知らずの歌に、君が代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖ならなむ。」とあり。

蘇命路の山　須彌山に同じ。

本地大勢至　本地は化身に對してその本體をいふ。大勢至は阿彌陀佛の脇士なる善薩。

左右左　舞の手ぶり。

三五夜中　十五夜。

七寶　金・銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・眞珠・玖瑰。

愛鷹山　アシタカヤマ。靜岡縣富士・駿東兩郡に跨る山。

何を隔てむ玉垣の、內外の神の御末にて、月も曇らぬ日の本や。シテ君が代は、天の羽衣まれにきて、地撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲添へて數々の、簫笛・琴・箜篌、孤雲の外に充ち滿ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、綠は波に浮島が、拂ふ嵐に花降りて、げに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる。シテ南無歸命月天子、本地大勢至。地東遊の舞の曲、シテ・ワキ或は天つ御空の綠の衣、地又は春立つ霞の衣、シテ色香も妙なり孃子の裳裾、地左右左、さいふ颯々の、花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。キリ地東遊の數々に、その名も月の宮人は、三五夜中の空に又、滿願眞如の影となり、御願圓滿・國土成就、七寶充滿の寶を降らし、國土にこれを施し給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の愛鷹山や富士の高嶺かすかになりて、天つ御空の霞に紛れて失せにけり。（謠曲）

譬喩

二〇　國語の愛護

私は國語をなるべく美しく、味のあるやうに、品の高いやうに發達させたいと思ひます。言葉の美とか味はひとかいふのは、例へば、「うまい物を食べた。」といふ事を言ひ表す場合に、「うまかつた。」「おいしかつた。」といへば、意味はわかるし文法にも合つてゐるが、たゞそれだけで、人を動かす味はひといふものがないでせう。それを「頬が落ちさうだ。」といふと、意味がわかるばかりでなく、一種の面白味がついて來るではありませんか。「途中で遊んでゐた。」「居睡をした。」といへば平明であるといふだけですが、「道草を食ふ。」「船をこぐ。」といへば、すぐに特別の味はひを感じさせられるではありませんか。これは何の爲でありませうか。いろ〳〵の理由がありませうけれども、その主なる一つは、思ひ寄せた譬喩が奇拔で、しかも

妥當
含蓄
常夜往
古事記に、「ここに天照大神、見長みて、天の石屋戸を閉ててて刺籠りましましき。すなはち高天原皆暗く、葦原の中つ國悉に闇し。此に因りて常夜往く。」とあり。
大祓
六月・十二月の晦日、百官以下天下萬民の罪穢を祓ひ除く儀式。
伊東忠太
工學博士。東京帝國大學名譽教授。古代建築に精し。

妥當である爲、もう一つは一事に二事を疊みこむ所から、簡潔で同時に含蓄があるやうになる爲でありませう。古事記天の岩戸入の段に「常夜往」といふ文句があります。天照大神が岩戸に御隱れになつたので、永久の夜がつゞいたといふ事を現した句でありますが、其の心持が、此の三字五音の中に、何とも言はれず簡潔に、しかも生き〳〵と現されて居る。昨日も、今日も、明日も、明後日もと、限りなく續く夜でせう。そして其の黑い姿の、果てしもない怪物が、のつし〳〵と限りなく長く〳〵進んで行くのでせう。私はかういふ詞の生きた命を味はひたいと思ふのであります。

かういふ例は、外にも澤山ありませう。祝詞の大祓の詞に、「底つ岩根に宮柱太敷立て……」といふ句があります。私など幾度も讀みながら、たゞ大家屋建築のための誇張的形容とのみ思つてゐましたが、大正十二年の大震災の折に、工學博士の伊東忠太氏が、耐震

祈年祭
陰曆二月四日、風雨の災害なく、穀類の豐熟せんことを神祇に祈る祭。

家屋の事を說かれた中に、「大昔の祝詞に、いはゆる底つ岩根に宮柱太敷立て。」といふのが建築の理想である。岩を離れた土の上に建てるから、地震に遭ふと一たまりもなく搖りつぶされるので、岩盤の上に立てれば、家全體が岩と一緒に動くから、めつたにつぶれるものでない。この岩盤の上に柱を立てる理想的建築法を、大昔の吾々の祖先が已に立派に道破し且實行してゐたのである。」といはれたのを見て、成程と感じたことがありました。また同じ祝詞の祈年祭の中に、「手肱に水沫かき足り、向股に泥かき寄せて、取作らむ奥つ御年を……」といふ文章があります。泥田の中に腕の附根まで、向股まで入れて、泥土をかきまはして稻を作れといふ意味でありますが、私の百姓友達が曾て此の文を見て、「實にえらい事を云つたものである。一體、田の草を除るのは、たゞ草を取るだけの仕事ではなくして、稻の根の生えて居る泥の中へ空氣と日光とを入れ

極意

るためである。だから表面の草を取るだけでなく、かん〳〵いふ烈日に照らされつゝ、煮え立つやうな田に浸つて、水の泡をぶつぶつ立てて十分に搔廻さねばならぬ。この祝詞が、かういふ農作道の極意を、原始的の言葉で簡潔に言ひ表してゐるのが實に面白い。」と云つて感歎したことがありました。かう見ると、國語の力といふものも、なか〳〵偉いものです。昔の言葉や文章だけではありません。日露戰爭の時の戰報に、「舷々相摩す。」といふ文句があつて評判になりましたが、これも「船端と船端とが摩れ合つた。」といふだけのことで、言ひ表し方によつては何でもないが、「舷々相摩す。」といふと、何とも云はれぬ面白さを見せてまゐりませう。私はすべてかういふ所に意を用ひて、成るべく自分の言葉をも立派にし、國民同士の言葉をも立派にしたいと思ふのであります。

芭蕉の俳文の一節に、

芭蕉は其の葉云云

「移ス芭蕉ヲ辭」にあり。

鳳鳥

鳳凰。古來、支那に於て尊重されし假想的瑞鳥。

芭蕉は其の葉廣うして琴を覆ふに足れり。或はなかば吹折れて鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ。

とありますが、これは事實だけをいふと、芭蕉の葉は幅一尺位、長さ六七尺もあるが、其の廣い長い葉の秋風に吹破られた有樣がむごたらしいといふのであります。しかし、これだけでは一向につまらないですが、琴とか、鳳凰の尾羽とか扇とかいふ、美しい、風流な、同時にいかにも自然で相應しい譬喩の景物を添へたので、非常に美しく面白くなりました。先づ一尺幅の長さ一間に餘る大きな葉、これで丁度よく覆へる御誂の品物は、十三絃の箏の琴であらうが、「琴を覆ふに足れり。」といふと、青い大きい葉が活きて光つて來て、其のかげからころりんしやんといふ耳を魅する音がして來るやうに感ぜられるではありませんか。次には、風に裂かれた樣子ですが、これも最も相應しい、同時に美しい鳳凰の尾を以てすれば、あの

しんなりとした鳥の王の尾羽を思ひ浮べて、其の裂けた痛ましさに涙せしめる味はひが加はつて來るでせう。かやうな次第で、見やう考へやうで一向人の心を惹くにも足らぬやうな事も、好い譬喩が引かれ、美しい詞が連ねられた爲に、此の味はひが何處から出て來たか、天から降つたか、地から涌いたかと思ふやうな妙味が出て來たのであります。

かやうに我が國には、昔も美しい言葉があつた、今も美しい言葉があります。そして、それは磨けば益、よくなるべき可能性をもつて居り、又言葉を磨けば國民の生活が美しくなり、國の位が高くなるのであるから、お互に注意して、國語を守り立てて行きたいといふのであります。我が國は昔から「言靈の幸はふ國」「言靈の助くる國」といはれました。深く窮めると、言靈の幸はふのは國の幸はふ所以であり、また國の一切事象は言葉の靈から重大なる「たすけ」を

言靈の幸はふ國　言靈の助くる國　共に萬葉集に出づ。言語の妙用によりて幸福をうくる國の義。日本國の異稱。

受けて居るのであります。國の言葉を正しく美しくするのは、言葉そのものの爲のみではありません。

（五十嵐力―國語の愛護）

二　激流の宮處

吉野の宮に幸しし時作れる歌

柿本人麻呂

やすみしし　わが大君の　聞しめす　天の下に　國は
しも　多にあれども　山川の　きよき河内と　御心を

柿本人麻呂　持統・文武兩天皇に仕ふ。

高市黒人　藤原宮時代の人。傳未詳。

櫻田・年魚市潟　今の名古屋市南區にありし地名。

吉野の國の　花散らふ　秋津の野邊に　宮柱　太敷き
ませば　もゝしきの　大宮人は　船並めて　朝川わた
り　舟ぎほひ　夕川わたる　この川の　絶ゆることな
く　この山の　いや高しらす　水はしる　激流の宮處
は　見れど飽かぬかも

反歌

見れど飽かぬよし野の川の常滑の絶ゆることなくまた
かへり見む

高市黒人

櫻田へ鶴鳴きわたる年魚市潟しほ干にけらし鶴鳴きわ
たる

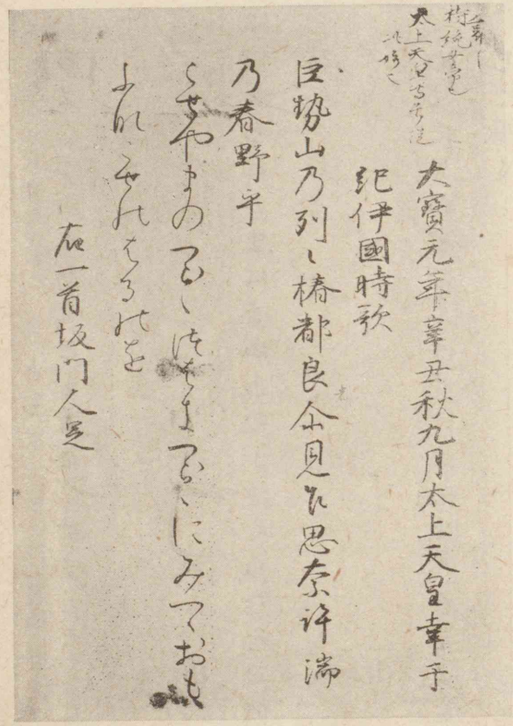
大伴旅人　武將。奈良朝前期の歌人。大納言に至る。天平三年歿。年六十七。（一三二五—一三九一）

香椎　福岡縣糟屋郡香椎村。

こせやまのつら〳〵つばきつら〳〵にみつゝおもふなこせのはるのを

大伴旅人

いざ子ども香椎の潟にしろたへのそでさへぬれて朝菜採みてむ



萬葉集古寫本

高橋蟲麻呂
奈良朝前期の歌人。傳未詳。

山上憶良
大寶元年（一三六三）遣唐少錄として渡海、翌年歸朝。聖武天皇の御代に筑前守たり。天平五年歿。年七十四。（一三二〇—一三九三）

山部赤人
奈良朝前期の歌人。傳未詳。

楸
楸の古名なりといふ。山茶科に屬する常綠灌木。

ちよろづの軍なりとも言あげせずとりてきぬべき男子
とぞおもふ

高橋蟲麻呂

憶良らはいまはまからむ子泣くらむその彼の母も吾を
待つらむぞ

山上憶良

ぬばたまの夜のふけゆけば楸生ふるきよき河原に千鳥
しば鳴く

山部赤人

旅人のやどりせむ野に霜ふらば我が子はぐくめ天の鶴
群

遣唐使人某の母

海犬養岡麻呂
聖武天皇頃の人。傳未詳。

湯原王
天智天皇の皇子なる志貴皇子の第二子。

大伴坂上郎女
奈良朝中期の女流歌人。旅人の妹。家持の叔母。生歿年未詳。

大伴家持
旅人の子。武將。萬葉集後期の代表的歌人。聖武天皇より桓武天皇に至る六朝に歷事す。中納言・持節征東將軍に至る。延曆四年（一四四五）歿。

御民吾生けるしるしあり天地のさかゆる時に遇へらく
念へば

海犬養岡麻呂

吉野なる夏實の川の川よどに鴨ぞ鳴くなるやまかげに
して

湯原王

うちのぼる佐保の川原の青柳は今は春べとなりにける
かも

大伴坂上郎女

わが屋戸のいさゝむら竹吹く風のおとのかそけきこの
夕べかも

大伴家持

うら〳〵に照れる春日に雲雀揚り心かなしもひとりし
おもへば
劍太　いよゝ磨ぐべしいにしへゆさやけく負ひて來に
しその名ぞ

子等を思ふ歌

山上憶良

瓜食めば　子どもおもほゆ　栗食めば　ましてしぬば
ゆ　いづくより　來たりしものぞ　まなかひに　もと
なかゝりて　安眠しなさぬ

反歌

しろがねも黃金も珠もなにせむにまされる寶子にしか
めやも

草昧

元明天皇
第四十三代。

散佚

奔放
ホンパウ。

二三　上代の農耕生活

草昧の土地を開拓して、一處定住の計を建て、耕人生活の基礎を築いて行つた上代日本民族の進路は、蓋し平易ではなかつたと思はれる。今日この方面を考察すべき資料として、比較的多くの分量を有するものは風土記である。風土記は、元明天皇の和銅六年の詔勅に依つて成つた地誌であつて、諸國に於ける古老の傳說、土地の狀態、產物の品名等を錄したものであるが、多くは散佚して、現存してをるものはその一部分に過ぎない。今、主としてこれ等の現存せる風土記を材料として、上代耕人生活の一面を描いて見ようと思ふ。

野性に富んだ河川は、自由に、奔放に、原野を潤して流れてゐる。雨降れば則ち溢れて、恣にその河床を更める。見渡す限り廣茫た

足結をぬらしつつ云々
萬葉集卷七に、「ゆだね蒔くあらきの小田を求めむと足結ひ出てぬれぬこの川の瀬に」とあり。

蘆牙の云々
古事記に、「次に國わかく浮脂の如くして、海月なす漂へる時に蘆牙のごと萌騰る物によりて成りませる神」とあり。

濕潤
シツジユン。

葛藤
カツトウ。

夜刀の神
常陸國風土記に見ゆ。

る平野には、蘆が一面に生えてゐて、秋風に白い穂波が重く靡いてゐる。春されば人々は足結をぬらしつゝ、蘆牙の萌騰る水のほとりに、新しい地を求めて新墾田を拓いた。稲はもと海のあなたから耕作法と共に將來されたといふ事であるが、この島の氣候・地味は、これが生育に好適して、やがて國民糧食の中心を占めるに至つた。

かくして田を作るに必要な水を爭ひ、おのが田へ溝を作り樋を通して水を誘ひ、これが爲に鬪爭の起る事もあつた。

蘆原の地はもとより濕潤であつたから、其處には蛇類が夥しく蕃殖してゐた。これを開墾して新耕の地とする事業の前には、住居を奪はれんとする蛇類との葛藤が起つた。古代の說話に蛇類に關するものの多い所以である。蛇身で頭に角のある夜刀の神が、相群れ來つて耕作を妨げ、或は池邊の椎の樹に昇り集うて、時を經ても去らなかつたといひ、また大蛇が多かつたので大神の地名

御年の神

五風十雨

百取の机
モモトリのツクエ。多くの飲食物を載せ竝べたる臺。

新嘗の祭

を遺した處もある。

蘆原の地は勞せずしてもとより豐かであつたけれども、尙神々の荒びを恐れる人々は、御年の神に白馬・白猪・白鷄を獻つて、八束穂の茂し穂に、奥つ御年の榮えん事を祈り、水口の神を祭つて齋種を下すのである。そして五風十雨、時により過ぎるのを歎いては、御馬に御鞍を具へて、龍田の神・水分の神を祭る。幸に秋の收穫になれば、飯にも汁にも、初穂を百取の机に置きたらはして皇神の御前に獻り、殘をば家の長が祝つて、新嘗の祭をする。

常陸國風土記に、昔、御祖の神が諸神の許を巡行し、駿河の國の富士の山に到つて、日が暮れたので宿りを求めた所、富士の神は新嘗の祭の夜である故、固く物忌をしてゐる由を以てこれを謝絕したが、常陸の國の筑波の神は迎へ入れて歡待したので、御祖の神も喜んで、

愛しきかも我が御子　巍きかも神宮　天地のむた　日月のむた　民草集ひことほぎ　御酒御食ゆたかに　代のことごと　日に日に彌榮えむ　千秋萬歲に　樂しみ窮らじ

と歌つたと傳へるのも、この新嘗の祭が如何に神聖な祭典であるかを語つてゐる。

祭をするのは、單に農作に關する事ばかりではない。すべての荒ぶる神を媚び鎭め、諸の汚穢不淨を祓ふ爲に行はれた。山を越えて行く路には、殊に荒ぶる神の障りが多かつた。その神の正體には、目に見えぬ瘴癘の氣もあつたであらう。漂流し來つた異種の人もあつたであらう。鷲に化けた鰐だと傳へてゐる處もある。その荒ぶる神の障り坐す道路を行く人は、十人のうちに五人は殺され、五人がうちに三人は斃された。荒ぶる神を祭り鎭めて、行旅を安らかにする爲には、佐比の祭が行はれた。

汚穢不淨

瘴癘の氣
シヤウレイのキ。

上代耕人の生活に最も親しかつた野獸は鹿であつた。山田を作れば自ら庵を作つて、その害を防がねばならなかつた。田の主が柵を作つて待ち、鹿が來て頭をさし入れて苗を食つたのを、捕へて頸を斬らうとしたら、命を助けてくれたなら、子々孫々に至るまで苗を食ふ事のない樣にしようと、誓約を立てたので赦してやつた。それ以來、その田の苗を鹿の食ふ事がなかつたといふ傳說も殘つてゐる。或は攝津の國の鹿が、背中に雪が降つた、また薄が生えたと夢見て、その妻が夢合をして凶兆であつたのに拘らず、淡路の島へ海中を泳ぎ渡らうとして、船人に遭つて射殺された話などを傳へてゐる。いにしへ野に立つ鹿の多かつた事は、「その擎げたる角は蘆の枯れたる原の如く、その氣吹は朝霧の如し。」といふ文のあるに見ても知るべきである。鹿が來て鳴いたり舌を出したりした事に因つて、地名とした處も甚だ多かつた。殊に蘆原の鹿は、

凶兆
キヨウチヨウ。不吉のしるし。

擎げたる云々
日本書紀卷七に見ゆ。

宍 シヽ。

太卜 フトマニ。神代に行はれし占の美稱。

その味が苦くて、食ふに山の宍に異なつてゐたとも言はれてゐる。かくして古代狩獵の目的物は、主として鹿であつた。鹿の肢體は大部分衣食に用立てられ、また太卜には、鹿の肩骨をうつ拔きに拔いて、これを燒いて吉凶を卜した。

これ等農耕に、狩獵に、寧ろ自ら恣であつた上代耕人の生活には、愉快な半面も決して少くはなかつたのであらうが、一面には常に私鬪の爲に備へてゐなければならなかつた狀態にあつた。これ等の割據的な大家族主義の生活の上に、やがて國家は發達して、一切を包容する樣になり、茲に始めて人々は眞の平和を樂しみ得る樣になつて行つたのである。

醇樸 ジュンボク。

推古天皇 第三十三代。

二三　天孫降臨の神話

一

古事記三卷は、日本の國民として、極めて重要なる意義を有する、我が國家の成立、國體の淵源を語り、民族の歷史を說くを目的として撰錄せられた典籍である。しかも本書は、ひとり上古の史書として貴重なるのみならず、同時に古代人の醇樸なる信仰を語る神書であり、またその豐麗なる言辭を盛る文學の書でもあるといふ多方面の性質を具へてゐる。

本書に語る所は、天地開闢の時から、推古天皇の御代までに及んでゐる。即ち三卷のうち、上卷は神代の物語であり、中下の二卷は、神武天皇以降の歷朝の記事である。この神代の物語こそは、日本の國家の成立を語る部分であり、これに對して中下の二卷は、かく

金剛不壞 コンガウフエ。極めて堅固にして破れざること。

修理固成 シユリコセイ。つくりかためなすこと。

の如くにして構成せられた國家の發達充實を語る部分である。この故に、上卷に語られる古史神話には、國家の創建を中心とする一大構成があつて、金剛不壞の國體の大精神は、實にこの間に說かれてゐる。而してこれに對する中下の二卷は、この大精神の實現證明の部分に當るのであつて、もとより萬世無窮の日本帝國の歷史は、いかなる時に至つても止むべき性質のもので無いのであるから、又いづれの御代で、便宜上筆を收めても差支無いのである。

かくの如く、古事記の上卷は、國家の創造といふ重大事件を、古史神話の形態に依つて語つてゐる。こゝに全體としての構成があり統一があるのであつて、起伏し照應しつゝ、筋を運んでゆく。

まづ天地開闢に始まり、伊邪那岐・伊邪那美二神の協力により國土が修理固成せられる。日本國を構成する諸島や、神々が出生し、最後に天照大神・月讀命・須佐之男命が出現せられる。然るに須佐之男命は、高天の原に升つて亂暴を爲されるので、天照大神がこれを忌んで天の岩戸にお隱れになる。そこで諸神が岩戸の前に會して、祭典を行ひ、天照大神が再び岩戸から御出現になる。かくて須佐之男命は、逐はれて出雲の國に至つて、八岐の大蛇を退治せられる。この天照大神と須佐之男命との物語は、三種の神器の由來を傳ふる部分として、重要なる位置を占めてゐる。

こゝに天照大神は、この三種の神器を天孫邇邇藝命にお授けになつて、豐葦原の中つ國の統治者としてお降しになる。これいはゆる天孫降臨の物語であつて、この段は、古史神話中にあつて中心的位置を占め、國家の創成の物語は、擧げてこの段に在るのである。

次に、天孫降臨以後の物語があつて、古事記上卷は終るのであるが、こは既に後記であつて、地上に於ける天孫の御事蹟を傳ふるのである。かくして、次の中卷下卷の記事に續いて、無限無終に日本

荒ぶる神

國家の歴史は繼續してゆくのである。

我等は、この古史神話を讀んで、いかにも日本の國家の創成が、莊嚴にして神聖なるを知るのである。天つ神の詔命に依りて、その若き御子が、地上を統治する爲に降下せられることは、卽ち國家の創成であると共に、古代日本人の祭典の精神でもあつたのである。またこゝには、古代の歴史的事實として傳へられてゐるが、代々の天皇の御降誕その事も、天つ神の詔命に依るその若い御子神の降下であると信ぜられてゐたのである。卽ち例へば、神武天皇の東征は、天つ神の御子として荒ぶる神を征討せられる意味に於て語り傳へられてゐる。

二

古事記に於ける天孫降臨の物語は、天照大神の詔命に依つて、まづ忍穗耳命の降下せられようとするに始まる。曰く、

ことよさす　依託す、命ずといふ意。

ありなり　「あるなり」の古語。

復奏　かへりごと、卽ち先方の返辭。

天照大神の命もちて、「豐葦原の千秋の長五百秋の瑞穗の國は、我が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らさむ國なり。」と、ことよさし給ひて天降し給ひき。こゝに天忍穗耳命、天の浮橋に立たして詔り給ひけらく、「豐葦原の千秋の長五百秋の瑞穗の國は、いたく喧ぎてありなり。」と告り給ひて、更に還り上らして、天照大神に申し給ひき。

そこで天つ神の御命令で、天の安の河原に、八百萬の神を集めて御相談の結果、これを鎭むべき神をお降しになることになり、初めに天菩比神を遣した所、須佐之男命の六世の孫で、勢力を有して居られる大國主神に媚び附いて、三年になるまでも復奏しなかつた。依つて又天若日子をお遣しになつたが、この神も八年になつても復奏しなかつた。そこで又御相談になつて、今度は、天尾羽張神の御子建御雷神に、天鳥船神を添へてお遣しになつた。

伊那佐　島根縣鏡川郡杵築の海濱の舊稱。
趺み坐る　あぐらをかくこと。
領く　占む、領有す。
鳥の遊　鳥を獵りて遊ぶこと。
御大の崎　島根縣八東郡美保關町の東方にある岬。夜見灣の西角。今地藏崎と稱す。
かれ　かゝれば、故に といふ古語。
逆手　呪をなす時に打つ拍手。
青柴垣　青葉の柴垣。神籬。神となりて神籬の中に隱るる意。

こゝをもちてこの二柱の神、出雲の國の伊那佐の小濱に降りつきて、十掬の劍を拔きて、浪の穗に逆に刺し立てて、その劍の尖に趺み坐て、その大國主神に問ひ給ひけらく、「天照大神・高木神の命もちて問ひに遣せり。汝が領ける葦原の中つ國は、我が御子の知らさむ國と言よさし給へり。かれ汝が心いかに。」と問ひ給ひしかば、答へ白しけらく、「僕は得白さじ。我が子八重事代主神白すべきを、鳥の遊・漁しに、御大の崎に往きて、まだ還り來ず。」と白しき。かれこゝに天鳥船神を遣して、八重事代主神を徵し來て、問ひ給ひし時に、其の父の大神に、「恐し。この國は天つ神の御子に獻り給へ。」といひて、その船を踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に打成して隱りましき。

そこで「また白すべき子ありや。」とお尋ねになつたので「また我が子建御名方神あり。これを除きては無し。」と申す折しも、その建御

五伴の緒　五つの部族の首長。
招ぎし　天照大神を天の岩戸より招き出し奉りしといふ意。
取持ちて　ひきうけて。

名方神が來て、建御雷神と武勇を競つたが、敗れて遂に信濃の諏訪に鎭まつた。依つて大國主神の爲には、天孫の宮殿と同樣の莊嚴なる宮殿を建造して、これを鎭め奉り、かくして葦原の中つ國は平定した旨、高天の原に參上して復命した。こゝに愈〻忍穗耳命がお降りにならうとして裝はせ給うた時に、御子、邇邇藝命が御生誕になつたので、忍穗耳命の奏せられるまゝに、天照大神は、邇邇藝命をお降しになることとなつた。

こゝに天兒屋命・布刀玉命・天宇受賣命・伊斯許理度賣命・玉祖命、幷せて五伴の緒を交り加へて、天降りまさしめ給ひき。こゝにかの招ぎし八尺の勾瓊・鏡、また草薙の劍、また常世の思金神・手力男神・天石門別神を副へ賜ひて詔り給ひけらく、「これの鏡は、もはら我が御魂として、我が御前をいつくがごと齋きまつれ。次に思金神は、御前の事を取持ちて奏し給へ。」と宣り給ひ

き。この二柱の神は、析く釧五十鈴の宮に齋き祭る。

かれこゝに天津日子番能邇邇藝命に詔り給ひて、天の石位を離れ、天の八重棚雲を押分けて、稜威の道別き道別きて、天の浮橋に、浮きじまりそり立たして、筑紫の日向の高千穗の靈しふる峰に天降りまさしめ給ひき。かれこゝに、天忍日命・天都久米命二人、天の石靫を取負ひ、頭椎の太刀を取佩き、天の槍弓を取持ち、天の眞鹿兒矢を手挾み、御前に立ちて仕へまつりき。

こゝに詔り給ひけらく、「此處は、韓國に向ひ、笠紗の岬に求ぎ通りて朝日の直刺す國、夕日の日照る國なり。かれ此處ぞいと吉き處。」と宣り給ひて、底つ石根に宮柱太知り、高天の原に氷椽高知りてましまし。

實にこの雄大なる神話に依つて、光輝ある日本國家の歴史は始まつたのである。

析く釧　五十鈴の枕詞。
天の石位　高天の原の御座所。
八重棚雲　幾重にもたなびきたる雲。
稜威の道別き云云　威風堂々と道を押開き押開き天降り給ふ意。
石靫　石の如き靫。靫は矢を入れ背に負ふ器。
頭椎の太刀　柄頭が槌のやうになれる太刀。
槍弓　槍にて作れる弓。
眞鹿兒矢　古代獣獵に用ひし矢の一稱。
氷椽　千木に同じ。

二四　庭燎に奉仕して

神風の伊勢の國、析く釧五十鈴の宮に鎮まります皇大神宮は、國の鎮め、世の鎮めとして、いくよろづ代をかけて極り無き國家の宗祀にましませり。天そゝり立つ老杉群の中に、神代ながらの宮居の姿、仰ぎまつるも尊し。

昭和四年十月二日は、式年御造營の事成りて、今宵しも御遷宮あらせらるゝ夜なり。草莽の微臣、生を常世の敷浪うち寄する國に享け、いさゝか敬神の忱を致しまつらむとて、庭燎の御役に出で立つ。

神の御庭をきよめし雨またくやみて、內院の夜はおごそかに、ぬばたまの闇につゝまれたり。物の光とては、御階の下に置ける火桶の燈かげのさゝやかなると、吾等が仕うまつる庭燎の光とのみ。

庭燎　ティレウ。ニハビ。御神樂等の際、焚きて明りとする篝火。
國家の宗祀
式年御造營　伊勢神宮は二十年毎に新に造營し奉る定めなり。
常世の敷浪うち寄する國　伊勢の國をいふ。
內院　御瑞籬の內。

松明 タイマツ。
奏申 奏上に同じ。
召立 メシタテ。人々を呼び立つること。
宮掌 クジャウ。

折々あかう燃えたつ火あかりに、正殿の千木・堅魚木の御金具、わづかに輝けり。天地の中に物の音なし。唯をり〳〵ひそかに聞ゆるは、遠方の老杉群のかげなる鈴蟲の聲のみ。神祕深き沈默の中に、畏みをることしばし。

勅使をはじめ、祭主の宮、大宮司以下、あまた神官の列の參入あり。さはれ、深き夜の闇につゝまれて、聞ゆるはたゞ履の音のみ。勅使は、御道敷の白布の上に裾を長くひき、おもむろに御階の下に進みて、かたへよりさゝぐる松明の光に御祭文を奏申せらる。松明の光のみひとゝころ明りて、ほのかに勅使の姿をうつし出せり。その色の尊さ。大宮司・少宮司は正殿にまゐのぼりて、畏み〳〵も御扉を開き奉る。その音の尊さ。

をりしも謠ひいづる御神樂歌、かなでいづる樂の調べのめでたさ。召立のこと終へて、宮掌がとなふる雞鳴三聲の朗かさ。やがて神儀渡御あらせらるゝや、庭燎の上には、水もてぬらしし莚をおほひて、光またく消されぬ。

神儀渡御

神皇正統記云々「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。わが國のみ此の事あり。異朝には其のたぐひなし。」とあり。

神典 神の事蹟を記したる書。

神風の伊勢の御民といのちうけてかしこし今宵御火たきまつる

神今しうつらせたまふ杉むらのよるの秋風おとさやさやに

神代おぼゆるこの御式を、まなかひにをろがみまつりつゝ、胸のうちにうかべるは、神皇正統記の卷首の句なり。身神國に生れ、幼くより神典に養はれて、今宵この神事に奉仕す。何らの幸ぞ。何らの喜ぞ。感極まりて、たゞ忝さの涙ぞこぼるる。

（佐佐木信綱）

親鸞　淨土眞宗の開祖。弘長二年歿。年九十。（一八三三―一九二二）

法然　名は源空。我が國に於ける淨土宗の開祖。建暦二年歿、年八十。（一七九三―一八七二）

吉水の教團　法然門下に屬する香の集團。吉水とは京都東山吉水にありし故に云ふ。

擾亂

眞摯　シンシ。

自修文

一愚禿親鸞

法然の門に入り、吉水の教團に加はれる親鸞の心には、平和なる法悅の光が輝いて來た。解脫の道は往生の願に依りて明らかになり、往生の願は、彌陀の本願を信じその名を稱念する事に依りて滿たされた。今や生も死も親鸞の心を煩はす事がない。淨土を願ふ心は、彼をして生死を超えたる彼岸に住せしめたからである。

擾亂の世界もまた、親鸞の平和を妨ぐることがない。法然の門弟數百人、師弟同じく念佛して法悅にむせぶ吉水の教團は、この世ながらの淨土とも思はれたからである。併し、この聖なる平和も長くは續かなかつた。吉水の教團は隆盛になるに隨つて、既に危機は孕んでをつたのである。新興の宗教に集るもの、必ずしも眞

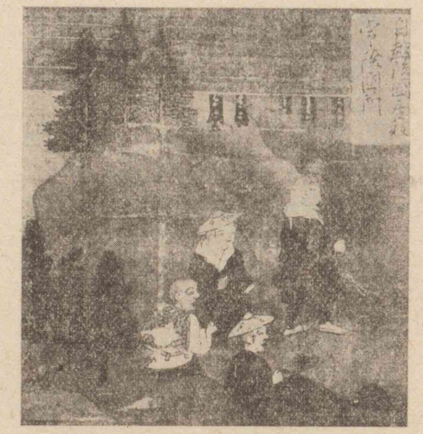
詠嘆的享樂

破戒無戒

南都北嶺　南都は興福寺、北嶺は延暦寺をさす。

誹毀　ヒキ。そしること。

摯なる求道者のみではない。恰も流行を追ふ如く、一種の勢ひに引かれて集るものも尠くはないのである。法然の門に集るものにも、かゝるものが無かつたといふことは出來ない。



親鸞

これらの人々にとりては、念佛往生といふことは、まゝならぬ世を呪ふが如き、詠嘆的享樂となる。隨つて善惡を簡ばず、破戒無戒を論ぜず、平等に救はるゝ本願の大道に感激するところなく、却つて行爲の反省を嘲笑するものさへ現るゝものである。

吉水教團のこの分子に著眼して、法然の淨土教に對する南都北嶺の誹毀は生じ、延暦寺・興福寺の學徒が、しば〳〵朝廷に奏達する

承元元年（一八六七）

行證
證道
悟に達すること。
釋門
佛の道を信奉する者、即ち僧侶をいふ。
眞假の門戸
儒林
ジュリン。
空師
法然のこと。

ところがあつた。勿論、それは新興の宗教に對する眞實の理解なきより來れるものであるが、彼等に乘ぜられる隙が全く無かつたとはいへない。しかしそれら内外の事情が相依りて、承元元年、吉水の教團は遂に解散するの止むなきに至つた。親鸞三十五歳の時である。

親鸞は後にその當時のことを敍述していふ、「ひそかにおもんみれば、聖道の諸教は行證ひさしく廢れ、淨土の眞宗は證道いま盛んなり。しかるに諸寺の釋門、教に昏くして眞假の門戸を知らず。洛都の儒林、行に迷ひて邪正の道路を辨ふることなし。或は僧儀をあらため、また姓名をたまうて遠流に處す。予はその一なり。されば、すでに僧にあらず俗にあらず、この故に禿の字をもて姓とす。空師ならびに弟子等、諸方の邊州に坐して五年の居諸をへたり。」と。その筆端は專ら新興の宗教に對する無理解を歎ずること

顯彰

逆緣
興法の便り

人間性

に向けられてある。併し、それは淨土教の眞實と、師法然の德とを顯彰せんがためであつて、若し當時の教團内部の觀察となれば、親鸞もまた恐らく別種の感想があつたであらう。新興の宗教が眞實の根柢を有する限り、これに對する迫害は、それを純化するものであり、その教團の解散は、即ちそれを擴張することに外ならぬのである。誠に歎くべき逆緣こそは、そのまゝ喜ぶべき興法の便りである。

われらは吉水の解散が、親鸞にとりて特に重要なる意味があつたことを思はざるを得ない。親鸞の配所は、日本海の風波荒き越後の國府である。こゝに五年、配所の月を眺むることに依りて、親鸞は深く離別の寂しさを味はうた。念佛を信ずるものは、如何なる所にあるも寂しいことがないといふのは、餘りに人間性を無視せるものである。むしろ寂しさを寂しさと感ずるこゝろこそ、眞

如來招喚の聲

內面化

邊鄙の群生

實に念佛せしむるものではないであらうか。寂しさは集團に於ける念佛に交る不純を洗淨して、純なる念佛に歸入せしむるのである。その境地にありては、念佛の聲すら絕して、たゞ如來招喚の聲を聞くのみである。それに依りて寂しさが除去されるのではない。たゞ寂しさが內面化されるのである。內面化されたる寂しさ、それこそは彼岸の涅槃を念はしむるものではないであらうか。されば淨土を願ふことは、そのまゝ如來の願であり、彌陀を稱念することは、そのまゝ彌陀の招喚であるといふ信心の智慧は、まさにこの寂しさによりて明瞭にせられたものであらう。

併し、寂しさはまた人懷かしさの心である。特に寂しさが內面的であるだけ、直ちに人の魂に接せんとする願が切である。かくて親鸞は、配所にありて、更に邊鄙の群生と語るの道を見出した。邊鄙の群生、その言葉は隣人に對しての敬意を缺くやうに見える。

法の友

十方衆生
佛敎にて云ふ全世界の諸民。

併し、其處に自己を見出せる親鸞にとりては、如何にそれは懷かしい言葉であつたであらう。それは大自然の胸より出でて、原始の願に生きんとするものの姿である。文字も知らず、善惡の分ちもさだかならざれども、素純なる魂に動く田舍の人々に接して、親鸞は都にありて思ひも及ばざりし法の友を見出せるのである。これらの人々に接して、親鸞は今さらに自己の眞相の「愚禿」であることを感知した。

「愚」こそは人間本來の相である。愚なる群生、それは如來の本願に「十方衆生」と呼ばれたものである。それ故に、如來の本願を信知することは、十方衆生の切なる要求に耳を傾くることに依りて開かるる。如來招喚の聲は、天上の音にあらずして、地上の響に於て聞かるる。本願を信ずる心は、願力の廻向である。故に信は願そのものの自證であるといふこと、すべてそれらは親鸞が邊鄙の群

群生海

沈潛（チンセン。）

生に於て自己を見出せることに依りて、今さらに感得せることである。

かくて邊鄙の群生海に身を沒することに依りて、親鸞の得たる愚禿の心は、素純なる宗教的要求に沈潛するのである。其處には未だ言葉とならざる、また言葉となし得ざる感情の流がある。而してこの感情を言葉として顯せるものこそ、親鸞にとりては、眞實の教といはるゝものであつた。善知識の教が疑なく信ぜらるゝことは、それが純なる念佛往生の道を說くからである。而して念佛往生の如來の本願なることは、愚禿の心に於てのみ領知せらるる。それ故に親鸞は、ます〳〵一切群生海の心に親しんだ。配所五年の後、勅免ありといへども、都に歸らずして更に下野・常陸へと轉住せることは、何かの事情もあつたことであらうが、田舍の人々に懷かしみを感じたることが、その有力なる理由であつたであら

教行信證

六卷。親鸞が淨土眞宗の宗義を書きたるもの。

佛智

金子大榮

佛教學者。廣島文理科大學講師。

う。

其處に親鸞は愚禿の心を徹底した。後に述作せられたる「教行信證」が、全く一種の聖典文集に外ならぬことも、愚禿の心よりせられたることである。しかもその文集が、自らなる系統と組織とを有することは、愚禿の深心に與へられたる佛智を思はしむる。卽ちそれは如來の願心に依る信心の理論を現すものともいふべきものである。

（金子大榮）

二　山路

山路を登りながらかう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、易い處へ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る。

人の世を作つたものは、神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒兩隣に、ちら〳〵する唯の人である。唯の人が作つた人の世が、住みにくいからとて越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は、人の國よりも猶住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處をどれ程

琤鏘の音云々
琤は玉の擦合ふ音、鏘は金石の響。詩想の胸に涌くをいふ。

靈臺方寸の云々
心を寫眞機に喩ふ。

澆季溷濁
ゲウキコンダク。

尺縑
セキケン。

不同不二の乾坤
藝術の境地を指す。

か寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の世を豐かにする故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引拔いて、有難い世界をまのあたり寫すのが詩である、畫である。或は音樂と彫刻とである。細かく云へば、寫さないでもよい。只目のあたり見れば、そこに詩も生き歌も涌く。著想を紙に落さずとも、琤鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せぬでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに、澆季溷濁の俗界を、清くうらゝかに收め得れば足る。

この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なきも、かく人世を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脫するの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建

千金の子
富豪の子。

立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て、千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして、明暗は表裏の如く、日のある處には屹度影がさすと悟つた。三十の今日はかう思うて居る。喜の深き時、憂愈深く、樂みの大いな程、苦みも大きい。これを切放さうとすると身が持てぬ。片附けようとすれば世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが殖えれば、寢る間も心配だらう。

閣僚の肩は、數百萬人の足を支へて居る。背中には重い天下がおぶさつて居る。旨い物も食はねば惜しい。少し食へば飽足らぬ。存分食へば後が不愉快だ。

余の考がこゝまで漂流して來た時に、余の右足は突然坐りの惡

い角石の端を蹈みそこなつた。平衡を保つ爲に、すはやと前に出した左足が、爲損じの埋合せをすると共に、余の腰は工合よく方三尺程な岩の上におりた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸と何の事もなかつた。

立上る時に向うを見ると、路から左の方に、バケツを伏せたやうな峰が聳えて居る。杉か檜か分らぬが、根元から頂まで悉く蒼黑い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、續目が確と見えぬ位靄が濃い。少し手前に禿山が一つ、群を抽んでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへ、はつきりとして居る。行く手は二町程で切れて居るが、高い處から赤い毛布が動いて來るのを見ると、登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。

土をならすだけなら、左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平かにしても、石は平かにはならぬ。石は切碎いても、岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を讓る氣色はない。向うで聞かぬ上は、乘越すか廻らなければならぬ。巖のない處でさへ歩きよくはない。左右が高くて、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くと云はんより、川底を渉ると云ふ方が適當だ。固より急ぐ旅ではないから、ぶら〳〵と七曲へかゝる。

足の下で雲雀云云

芭蕉の句に、「雲雀より上に休らふ峠かな。」とあり。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見おろしたが、どこで鳴いてるか、影も形も見えぬ。只、聲だけが明かに聞える。せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて居たたまらない樣な氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の

餘裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし鳴きあかし、また鳴きくらさなければ氣が濟まぬと見える。其の上、どこまでも登つて行く、いつまでも登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて漂うて居るうちに、形は消えて無くなつて、只聲だけが空の裏に居るのかも知れぬ。

十文字云々

去來の句に、「時鳥なくや雲雀の十文字。」とあり。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆樣に落つる所を、際どく右へ切れて、横に見おろすと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛上つて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と上る雲雀が、十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に落ちる時も上る時も、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を取ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居處さへ忘れて正體なくなる。

只、菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に、魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたもののうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちで覺えた處だけ諳誦して見たが、覺えて居る處は二三句しか無かつた。其の二三句のなかにこんなのがある。

前を見ては後を見ては
物欲しと憧るゝかなわれ
腹からの笑といへど
苦みのそこにあるべし
美しき極みの歌に

シェレー　英國十九世紀初期の抒情詩人。（一七九二―一八二二）雲雀の詩は一八二〇年の作。ここに引用せるは、全篇二十一節中の第十八節なり。

悲しさの極みの想籠るとぞ知れ

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の樣に思ひ切つて一心不亂に前後を忘却して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で濟むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神經が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲みも多からう。そんならば、詩人になるのも考へものだ。

萬斛の愁

暫くは路が平らで、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に、時々蒲公英を蹈附ける。鋸の樣な葉を遠慮なく四方へ伸して、眞中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣をとられて、蹈附けたあとで、氣の毒なことをしたと振向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮坐して居る。呑氣なものだ。又考を

つゞける。

詩人に憂はつきものかも知れぬが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦みもない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍るばかりだ。蒲公英も其の通り。櫻も。――櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦みも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

然し、苦みのないのは何故だらう。只、此の景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。只、此の景色が、――腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬ此の景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力はこゝに於て

醇乎

塵界

尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたりは、人の世につきものだ。余も三十年の間、それを爲通して飽き〳〵した。飽き〳〵した上に、芝居や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞する樣なものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少なからう。どこまでも世間を出る事が出來ぬのが彼等の特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なものも、此の境を解脱することを知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を驅歩いて錢の勘

菊を採る云々　陶淵明の飲酒二十一首の中の詩に、「結レ廬在二人境一。而無二車馬喧一。問レ君何能爾。心遠地自偏。採レ菊東籬下。悠然見二南山一。山氣日夕佳。飛鳥相與還。此中有眞意。欲レ辯已忘レ言。」とあり。

獨坐す云々　王維の詩、「題二竹里館一」の中に、「獨坐幽篁裏。彈琴復長嘯。深林人不レ知。明月來相照。」とあり。

不如歸　徳富蘆花の作れる小説。

金色夜叉　尾崎紅葉の作れる小説。

定を忘れる暇がない。シェレーが雲雀を聞いて歎息したのも無理ではない。嬉しい事に、東洋の詩歌にはそこを脱したのがある。「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る。」只、それぎりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出て來る。垣の向うに隣の娘が覗いて居る譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害得失の汗を流し去つた心持になれる。「獨坐す幽篁の裏彈琴復た長嘯。深林人知らず、明月來りて相照す。」只、これだけのうちに、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功徳は、「不如歸」や「金色夜叉」の功徳ではない。汽車・汽船・權利・義務・道徳・禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりと寢込む樣な功徳である。

（夏目漱石―草枕）

日本文學年表略

○神武天皇より孝德天皇に至る部分は、縱に排列せり。
○書名の下の人名は、其の書の著者又は撰者なり。
○書名欄に括弧を附せるものは、件名にして書名に非ざるものとす。
○書名・人名はほゞ年代順に排列し、その不明なるものは推定による。
但し、現代は文學運動に携りし順序に人名を排列せり。

上代

神武（元―七六）　綏靖（八〇―一一二）　安寧（一一二―一五〇）　懿德（一五一―一八四）
孝昭（一八六―二六八）　孝安（二六九―三七〇）　孝靈（三七一―四四六）　孝元（四四七―五〇三）
開化（五〇三―五六三）　崇神（五六四―六三一）　垂仁（六三二―七三〇）　景行（七三一―七九〇）
成務（七九一―八五〇）　仲哀（八五二―八六〇）　應神（八六〇―九七〇）　仁德（九七三―一〇五九）
履中（一〇六〇―一〇六五）　反正（一〇六六―一〇七〇）　允恭（一〇七二―一一一三）　安康（一一一三―一一一六）
雄略（一一一六―一一三九）　清寧（一一四〇―一一四四）　顯宗（一一四五―一一四七）　仁賢（一一四八―一一五八）
武烈（一一五八―一一六六）　繼體（一一六七―一一九一）　安閑（一一九一―一一九五）　宣化（一一九五―一一九九）
欽明（一一九九―一二三一）　敏達（一二三二―一二四五）　用明（一二四五―一二四七）　崇峻（一二四七―一二五二）
推古（一二五二―一二八八）　舒明（一二八九―一三〇一）　皇極（一三〇二―一三〇五）　孝德（一三〇五―一三一四）

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
齊明	(一三一五—一三二一)				祭典に唱へらるゝ詞章。祝福の意を有するを壽詞と稱す。延喜式に收めらる。
天智	(一三二一—一三三一)		(祝詞・壽詞)		
弘文	(一三三一—一三三二)				
天武	(一三三三—一三四六)				國文を以て書かれたる詔勅。續日本紀に收められる。
持統	(一三四六—一三五七)	朱鳥			
文武	(一三五七—一三六七)	大寶・慶雲	(宣命)	柿本人麻呂(和銅初年歿?)	萬葉集の歌人。
元明	(一三六七—一三七五)	慶雲・和銅		高市黑人(歿年未詳)	萬葉集の歌人。
元正	(一三七五—一三八四)	靈龜・養老	古事記	太安麻呂(養老七年歿)	神代より推古朝に至る歷史を錄す。和銅五年奉る。
			風土記		和銅六年の詔によりて撰進せる各國の地誌。經りて現存するは、播磨・常陸・出雲・肥前・豐後なり。
聖武	(一三八四—一四〇九)	神龜・天平・天平感寶	日本書紀	舍人親王等	神代より持統朝に至る漢文の編年體の史書。養老四年撰進。
			出雲國風土記	大伴旅人(天平三年歿)	萬葉集の歌人。
				山上憶良(天平五年歿)	天平五年撰進。
				高橋蟲麻呂(歿年未詳)	萬葉集の歌人。
				舍人親王(天平七年歿)	萬葉集の歌人。日本書紀の撰者。

孝謙	(一四〇九—一四一八)				
淳仁	(一四一八—一四二四)	天平勝寶・天平寶字	懷風藻		
稱德	(一四二四—一四三〇)	天平寶字・天平神護・神護景雲	萬葉集	山部赤人(歿年未詳)	萬葉集の歌人。
光仁	(一四三〇—一四四一)	寶龜・天應			上代の漢詩集。天平勝寶三年成る。上代の歌集。天平寶字三年の作を最後とす。
中古					
桓武	(一四四一—一四六六)	天應・延曆			
平城	(一四六六—一四六九)	大同			
嵯峨	(一四六九—一四八三)	大同・弘仁	續日本紀		
淳和	(一四八三—一四九三)	弘仁・天長	古語拾遺		
仁明	(一四九三—一五一〇)	天長・承和・嘉祥	文鏡祕府論	淡海三船(延曆四年歿)	詩人。
文德	(一五一〇—一五一八)	嘉祥・仁壽・齊衡・天安	筆眼心抄	大伴家持(延曆五年歿)	萬葉集の歌人。或はその撰者ともいはる。
清和	(一五一八—一五三六)	天安・貞觀	(神樂歌)(催馬樂)	菅野眞道等	文武天皇より桓武天皇の延曆十年に至る史書。
陽成	(一五三六—一五四四)	貞觀・元慶	日本靈異記	齋部廣成	齊部氏に傳へたる舊傳を記せしもの。
光孝	(一五四四—一五四七)	元慶・仁和	凌雲集	景戒	奈良朝時代の佛教說話集。
				小野岑守等	漢詩集。
				空海(承知二年歿)	詩の法則を論ぜしもの。
				小野篁(仁壽二年歿)	詩文に巧なり。
				在原業平(元慶四年歿)	貞觀の頃より漸次固定せり。歌人。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
宇多	（一五四七—一五五七）	仁和・寛平		遍昭（寛平二年歿）	歌人。
醍醐	（一五五七—一五九〇）	寛平・昌泰・延喜・延長	竹取物語		かぐや姫を主人公とせる傳奇的小說。
			伊勢物語		在原業平の歌を中心とせる短篇說話集。
			菅家文集	菅原道眞（延喜四年歿）	詩文に巧なり。
			古今和歌集	紀友則（延喜五年歿）	歌人。古今和歌集撰者。
			延喜式	紀貫之等（延喜五年歿）	最初の勅撰和歌集。延喜五年撰。
				藤原忠平等	朝廷・地方廳の定則を記す。延長五年撰進。
朱雀	（一五九〇—一六〇六）	延長・承平・天慶		凡河内躬恒（延喜七年歿）小野小町	歌人。古今和歌集撰者。
			大和物語	伊勢（天慶二年歿）	歌人。
			土佐日記	紀貫之（天慶九年歿）	伊勢物語の系統を引ける歌物語。
			後撰和歌集	大中臣能宣等	歌人。古今和歌集撰者。土佐日記は貫之が土佐より都へ歸る時の日記。
				壬生忠岑（康保二年歿）	歌人。古今和歌集撰者。
				源順（永觀元年歿）	漢學者。歌人。後撰和歌集撰者。
村上	（一六〇六—一六二七）	天慶・天曆・天德・應和・康保			貴宮を主人公とせる物語。
冷泉	（一六二七—一六二九）	康保・安和			落窪の君を主人公とせる物語。
圓融	（一六二九—一六四四）	安和・天祿・天延・貞元・天元・永觀	宇都保物語		
花山	（一六四四—一六四六）	永觀・寛和	落窪物語		
一條	（一六四六—一六七一）	寛和・永延・永祚・正曆・長德・長保・寛弘	蜻蛉日記	藤原道綱母	右大將道綱母の日記。
三條	（一六七一—一六七六）	寛弘・長和	拾遺和歌集	花山天皇又は藤原公任	勅撰和歌集。
後一條	（一六七六—一六九六）	長和・寛仁・治安・萬壽・長元		曾根好忠	歌人。曾丹集。
			枕草子	清少納言	清少納言の隨筆。
			源氏物語	紫式部	光源氏と藤大將とを主人公とせる物語。平安朝時代小說の中心をなす。
			紫式部日記	同人	宮仕中の雜事雜感を記せるもの。
後朱雀	（一六九六—一七〇五）	長元・長曆・長久・寛德	和漢朗詠集	藤原公任（長久二年歿）	朗詠に適する漢詩と和歌とを竝擧せるもの。
			和泉式部日記	和泉式部	著者の二箇年間の日記。
			赤染衞門集	赤染衞門	赤染衞門の歌集。
後冷泉	（一七〇五—一七二八）	寛德・永承・天喜・康平・治曆	狹衣物語		狹衣大將を主人公とせる物語。
			玄々集	能因	能因の歌集。
			濱松中納言物語		濱松中納言を主人公とせる物語。
後三條	（一七二八—一七三二）	治曆・延久	更級日記	菅原孝標女	孝標の女の日記。
			夜半の寢ざめ	同人	源氏の系統を引ける物語。
白河	（一七三二—一七四六）	延久・承保・承曆・永保・應德	本朝文粹	藤原明衡	詩文集。
			成尋阿闍梨母集	成尋阿闍梨母	延久四年に阿闍梨が入宋し、後に殘りしが子に別れし悲歎の情を記せし日記。
			とりかへばや物語	源隆國	文章家。歌人。權大納言大將たりし人の男女二人の子に關する物語。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
堀河	(一七四六—一七六七)	應德・寬治・嘉保・永長・承德・康和・長治・嘉承	堤中納言物語		短篇小說集。
			榮華物語	源經信(承曆元年歿)	歌人。
			後拾遺和歌集	藤原通俊(康和元年歿)	藤原道長の一生を中心とせる史書。勅撰和歌集。應德三年撰進。
鳥羽	(一七六七—一七八三)	嘉承・天仁・天永・永久・元永・保安	大鏡		藤原道長を中心とせる列傳體の史書。
崇德	(一七八三—一八〇一)	保安・天治・大治・天承・長承・保延・永治	金葉和歌集	源俊賴	勅撰和歌集。
近衛	(一八〇一—一八一五)	永治・康治・天養・久安・仁平・久壽	朝野群載	三善爲康(保延五年歿)	漢文集。三善爲康編。
			詞花和歌集	藤原顯輔(久壽二年歿)	勅撰和歌集。
後白河	(一八一五—一八一八)	久壽・保元	今昔物語集		日本・支那・印度の說話集。源隆國の作か。
二條	(一八一八—一八二五)	保元・平治・永曆・應保・長寬・永萬	今鏡		大鏡の後をうけて、後一條天皇より高倉天皇までの紀、賴通以下の公卿及びそれに附隨せる史談、逸話を記せり
六條	(一八二五—一八二八)	永萬・仁安			
高倉	(一八二八—一八四〇)	仁安・嘉應・承安・安元・治承	袋草子	藤原清輔(治承元年歿)	歌學評論の書。
安德	(一八四〇—一八四五)	治承・養和・壽永			

中世

後鳥羽	(一八四五—一八五八)	文治・建久	山家集	西行(建久元年歿)	西行の歌集。
			後德大寺實定(建久三年歿)		歌人。
			梁塵祕抄	後白河天皇(建久三年崩)	當時の歌謠集。
土御門	(一八五八—一八七〇)	建久・正治・建仁・元久・建永・承元	千載和歌集	藤原俊成(元久元年歿)	勅撰歌集。文治四年。藤原俊成撰進。
			新古今和歌集		勅撰和歌集。元久二年。通具・有家・定家・家隆・雅經等。
順德	(一八七〇—一八八一)	承元・建曆・建保・承久	方丈記	藤原良經(建永元年歿)鴨長明(建保四年歿)	歌人。鴨長明の隨筆。
			金槐和歌集	源實朝(承久元年歿)	源實朝の歌集。
仲恭	(一八八一—一八八一)	承久	水鏡		大鏡の前を補ひて、神武天皇より仁明天皇までの編年體の歷史。
後堀河	(一八八一—一八九二)	承久・貞應・元仁・嘉祿・安貞・寬喜・貞永	海道記	慈圓(嘉祿元年歿)	京都と鎌倉とを往復せし旅日記。作者は源光行といはるれど、未だ確かならず。
			保元物語		保元の亂を中心とせる軍記物語。
			平治物語		平治の亂を中心とせる軍記物語。
			平家物語		平家の勃興より平氏の滅亡に至るまでの事件を敍述せり
			源平盛衰記	源通具(嘉祿三年歿)	平清盛の榮華を中心に、平家の興亡を取扱へり。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
四條	(一八九二—一九〇二)	貞永・天福・文曆・嘉禎・曆仁・延應・仁治	拾遺愚草	藤原定家(仁治二年歿)	定家の歌集。
			新勅撰和歌集		勅撰集。貞永元年撰。
			東關紀行		京都と鎌倉とを往復せる紀行文。
			宇治拾遺物語		今昔の系統を引ける説話集。
			(田樂)		農夫の勞を慰するより起りし一種の演藝にして、遊興、神事の際に行はる。
後嵯峨	(一九〇二—一九〇六)	仁治・寛元	十訓抄	橘成季	儒佛に關する教訓説話。
後深草	(一九〇六—一九一九)	寛元・寶治・建長・康元・正嘉・正元	古今著聞集		説話集。
龜山	(一九一九—一九三四)	正元・文應・弘長・文永	吾妻鑑		鎌倉幕府に關する事件を記せるもの。
後宇多	(一九三四—一九四七)	文永・建治・弘安	續後拾遺和歌集	二條爲家(建治元年歿)	勅撰集。建久三年撰進。
			十六夜日記	京極爲教(弘安二年歿)	歌人。
伏見	(一九四七—一九五八)	弘安・正應・永仁		阿佛尼(弘安六年歿)	阿佛尼の鎌倉へ下りし時の旅日記。
後伏見	(一九五八—一九六一)	永仁・正安			
後二條	(一九六一—一九六八)	正安・乾元・嘉元・德治・延慶・應長	(宴曲)		宴席等にて歌はれし歌謠。明空の撰に宴曲集・宴曲抄等あり。
花園	(一九六八—一九七八)	德治・延慶・應長・正和・文保			

後醍醐	(一九七八—一九九九)	文保・元應・元亨・正中・嘉曆・元德・元弘・建武・延元	玉葉和歌集	冷泉爲相(嘉曆三年歿)	歌人。
			徒然草	吉田兼好(正平五年歿)	兼好の隨筆。
			神皇正統記	北畠親房(正平九年歿)	神代より後村上天皇に至る歷代の事蹟を述べ、所信を披瀝せるもの。
後村上	(一九九九—二〇二八)	延元・興國・正平	吉野拾遺	隱士松翁	吉野朝に關する説話を集む。
長慶	(二〇二八—二〇四三)	正平・建德・文中・天授・弘和		頓阿(元中元年歿)	歌人。
後龜山	(二〇四三—二〇五二)	弘和・元中	增鏡	觀阿彌(元中元年歿)	能樂師。謠曲作者。
後小松	(二〇五二—二〇七二)	元中・明德・應永	新葉和歌集	宗良親王(元中二年薨?)	後鳥羽天皇より後村上天皇の御代に至る間の事件を記す。
			菟玖波集	二條良基(元中五年歿)	准勅撰集。吉野朝の人々の歌を集む。
稱光	(二〇七二—二〇八八)	應永・正長	太平記		二條良基撰。連歌撰集の始。
			(舞の本)		花園天皇より後村上天皇に至る五十年間の軍記物語。
			(謠曲)		幸若の舞の詞。
後花園	(二〇八八—二一二四)	正長・永享・嘉吉・文安・寶德・享德・康正・長祿・寬正	(狂言)	世阿彌(康元元年歿)	能樂の詞章。
					能の演ぜらるゝ間に行ふ狂言の詞章。狂言記・續狂言記・拾遺狂言記に收めらる。
後土御門	(二一二四—二一六〇)	寬正・文正・應仁・文明・長享・延德	義經記		能樂師。謠曲作者。
					義經の一生を小説的に記述せるもの。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
後柏原	(二一六〇—二一八六)	明應・文龜・永正・大永・享祿・天文・弘治	曾我物語 古今童蒙抄 歌林良材集 新莵玖波集 獨吟千句 犬筑波集 (お伽草子)	一條兼良 (文明十三年歿) 飯尾宗祇 (文龜二年歿) 荒木田守武 (天文十八年歿) 山崎宗鑑 (天文三年歿)	曾我兄弟に關する物語。何れも歌論。連歌集。明應五年成る。守武の俳諧集。宗鑑の俳諧集。室町時代に起りし説話を平易に敍述せるもの。
後奈良	(二一八六—二二一七)				
正親町	(二二一七—二二四六)	弘治・永祿・元龜・天正			

近世

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
後陽成	(二二四六—二二七一)	天正・文祿・慶長	詠歌大概抄	細川幽齋 (慶長十五年歿)	詠歌の法則・注意等を記したる書。
後水尾	(二二七一—二二八九)	慶長・元和・寛永	醒睡笑	安樂庵策傳 (寛永九年歿)	笑話を輯錄したるもの。
明正	(二二八九—二三〇三)	寛永			
後光明	(二三〇三—二三一四)	寛永・正保・慶安・承應	新增犬筑波集	松永貞德 (承應二年歿)	俳諧集。
後西	(二三一四—二三二三)	承應・明暦・萬治・寛永	西翁十百韻	西山宗因 (天和二年歿)	著者の千句集。
靈元	(二三二三—二三四七)	寛文・延寶・天和・貞享	萬葉集管見	下河邊長流 (貞享三年歿)	萬葉集の註釋書。
東山	(二三四七—二三六九)	貞享・元祿・寶永	世間胸算用	井原西鶴 (元祿六年歿)	世渡りの祕訣、商賣に拔目なきことを書きたるもの。
			日本永代藏	同人	當時の町人生活の氣質・風俗を描きたるもの。
中御門	(二三六九—二三九五)	寶永・正德・享保	七部集	松尾芭蕉 (元祿七年歿)	芭蕉及びその一派の句錄。
			奥の細道	同人	江戸より奥羽・北陸等の諸國を行脚せし時の紀行文。
			大日本史	德川光圀 (元祿三年歿)	神武天皇より後小松天皇に至る本紀竝びに公武諸臣の列傳。
			萬葉代匠記	僧契沖 (元祿十四年歿)	萬葉集の註釋書。
			文草發句集	內藤丈草 (元祿七年歿)	句集。後人の編。
			去來抄	向井去來 (寶永元年歿)	俳門初學者の案內書。
			源氏物語湖月抄	北村季吟 (寶永二年歿)	源氏物語の註釋書。
			梨本集	戶田茂睡 (寶永三年歿)	歌學書。
			雪中庵嵐雪文集	服部嵐雪 (寶永四年歿)	嵐雪の遺文數篇を集めしもの。
			五元集	榎本其角 (寶永四年歿)	著者の句集。
			養生訓	貝原益軒 (正德四年歿)	養生に關する通俗書。
			風俗文選	森川許六 (正德五年歿)	芭蕉・其角其の他俳家二十八人の俳文を編輯したるもの。
			とくとくの句合	山口素堂 (享保元年歿)	著者自家の俳句を自ら評せし三十六番の句合。
			曾我會稽山	近松門左衞門 (享保九年歿)	曾我兄弟の復讐を骨子として作りたる淨瑠璃。

櫻町	(二三九五—二四〇七)	享保・元文・寛保・延享	國性爺合戰	同人
			出世景清	同人
			藩翰譜	新井白石（享保十年歿）
			折たく柴の記	同人
			俳諧十論	各務支考（享保十六年歿）
			駿臺雜話	室鳩巣（享保九年歿）
			萬葉集童蒙抄	荷田春滿（元文元年歿）
			ひとりごと	上島鬼貫（元文三年歿）
桃園	(二四〇七—二四二二)	延享・寛延・寶曆	菅原傳授手習鑑	竹田出雲（寶曆六年歿）
			假名手本忠臣藏	同人
			雲萍雜志	柳澤淇園（寶曆八年歿）
後櫻町	(二四二二—二四三〇)	寶曆・明和	萬葉考	賀茂眞淵（明和六年歿）
			縣居歌集	同人
			冠辭考	同人
後桃園	(二四三〇—二四三九)	明和・安永		炭太祇（明和八年歿）

明國の忠臣鄭芝龍を中心人物とし、明國内の爭亂を記せる淨瑠璃。

源平合戰後の惡七兵衛景清のことを記せる淨瑠璃。

慶長五年より延寶八年に至る八十年間の萬石以上の諸侯の傳記・沿革等を集錄したるもの。

自家の經歷・雜感を記したる自傳。

俳諧傳・俳諧道・俳諧德等俳諧に關する論十編をあつめたるもの。

學術・道德に關する隨筆。

萬葉集の註釋書。

俳諧隨筆。

菅原道眞の一生を敍したる淨瑠璃。

赤穗義士復讐の顚末を脚色したるもの。

著者の隨筆。

萬葉集の註釋書。

著者の歌集。

枕詞の註釋書。

俳人。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概記
光格	(二四三九—二四七七)	安永・天明・寛政・享和・文化	國歌八論餘言	田安宗武（明和八年歿）	歌學書。
				木端（安永二年歿）	狂歌師。
			歌文要語	建部綾足（安永三年歿）	詠歌・作文の要語を糾錄したるもの。
			風來六々部集	平賀源內（安永八年歿）	著者の狂文集。
			あゆひ抄	富士谷成章（安永八年歿）	語學者。
			常山紀談	湯淺常山（天明元年歿）	戰國時代より德川初期に至るまで百餘年間における名將傑士の言行錄。
			鶉衣	横井也有（天明三年歿）	歌人。
			蕪村七部集	與謝蕪村（天明三年歿）	著者の俳文集。
			蓼太句集	大島蓼太（天明七年歿）	著者の俳句集。
			柳樽	柄井川柳（寛政二年歿）	その一派の句集。
			曉臺句集	加藤曉臺（寛政四年歿）	柄井川柳が選出せる川柳の集。
			頭光	（寛政八年歿）	著者の俳句集。
			六帖詠草	小澤蘆庵（享和元年歿）	狂歌師。
					作者の歌集。

仁孝	（二四七七—二五〇六）	文化・文政・天保・弘化	古事記傳	本居宣長（享和元年歿）	古事記の註釋書。
			萬葉考槻の落葉	荒木田久老（文化元年歿）	萬葉集第三巻の註釋。
			近世畸人傳	伴蒿蹊（文化三年歿）	碩德・孝義・貞烈者・歌人・俳人等著名の士百餘名の傳記。
			東西遊記	橘南谿（文化三年歿）	著者の紀行文。
			うけらが花	加藤千蔭（文化五年歿）	著者の歌文集。
			琴後集	村田春海（文化八年歿）	著者の歌文集。
			昔語稲妻表紙	山東京傳（文化十三年歿）	小說。
			兎々草紙	木下幸文（文政四年歿）	著者の隨筆集。
			群書類從	塙保己一（文政五年歿）	古今の書冊を集輯出版したるもの。
			浮世風呂	式亭三馬（文政五年歿）	滑稽小說。
			浮世床	同人	滑稽小說。
			蜀山百首	太田南畝（文政六年歿）	著者の狂歌集。
			萬葉集燈	富士谷御杖（文政六年歿）	萬葉集巻一の註。
			泊洒舍集	清水濱臣（文政七年歿）	著者の文集。
			おらが春	小林一茶（文政十年歿）	俳文・俳句集。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
孝明	（二五〇六—二五二六）	弘化・嘉永・安政・萬延・文久・元治・慶應	東海道四谷怪談	鶴屋南北（四世）（文政十三年歿）	怪談に取材せる脚本。
			花月草紙	松平定信（文政十三年歿）	著者の和文隨筆集。
			しみのすみか物語	石川雅望（文政十三年歿）	假名書の雜話集。
			雅言集覽	同人	本邦古來の雅言を說明したる辭彙。
			良寛和尙和歌集	僧良寛（天保二年歿）	自家の家集。後人の編。
			東海道中膝栗毛	十返舍一九（天保二年歿）	彌次郎兵衞・北八を主人公とせる滑稽小說。
			日本外史	賴山陽（天保三年歿）	源平二氏以下德川氏に至る諸武家の歷史。
			日本政記	同人	神武天皇より後陽成天皇に至る二千年間の編年史。
			倭心三百首	本居大平（天保四年歿）	國學者。
			鳩翁道話	柴田鳩翁（天保十年歿）	心學に關する講談筆記。
			倩紫田舍源氏	柳亭種彥（天保十三年歿）	源氏物語の飜案にして、足利光氏を中心とせる小說。
			桂園一枝	香川景樹（天保十四年歿）	著者の歌集。
			古道大意	平田篤胤（天保十四年歿）	我が古道の大要を講釋したるもの。
			比古婆衣	平田信友（弘化三年歿）	諸種の考證を集錄したるもの。
			土佐日記考證	岸本由豆流（弘化三年歿）	土佐日記の註釋

松屋叢話	小山田與清（弘化四年歿）	著者の雜錄。	
南總里見八犬傳	瀧澤馬琴（嘉永元年歿）	里見氏の勇士八人の事蹟を中心とせる歷史小說。	
椿說弓張月	同　人	源爲朝の一生を綴れる小說。	
稜威道別	橘守部（嘉永二年歿）	神代紀の註釋。	
柿園詠草	加納諸平（安政四年歿）	著者の歌集。	
萬葉集古義	鹿持雅澄（安政五年歿）	萬葉集の註釋書。	
梁塵後抄	熊谷直好（文久二年歿）	神樂歌・催馬樂の註釋書。	
浦のしほ貝	同　人	著者の歌集。	
櫨園歌集	中島廣足（文久四年歿）	著者の歌集。	
櫨のしづ枝	同　人	著者の隨筆集。	
平賀元義歌集	平賀元義（慶應元年歿）	著者の歌集。後人の編。	
草徑集	大隈言道（明治元年歿）	著者の歌集。	
志濃夫廼舍歌集	橘曙覽（明治元年歿）	著者の歌集。	
調鶴集	井上文雄（明治四年歿）	著者の歌集。	
忍草	八田知紀（明治六年歿）	歌集。	

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
明治	（二五二七—二五七二）	慶應・明治	世界國盡	福澤諭吉（明治三十四年歿）	世界各國の歷史・地理を七五調を以て記せるもの。
			學問のすゝめ	同　人	學問の立場を明かにせるもの。
			たづがね集	高崎正風（明治四十五年歿）	著者の歌集。
			西洋道中膝栗毛	假名垣魯文（明治三十七年歿）	彌次郎兵衞・北八の上海より英國に至る道中記。
			默阿彌脚本集	河竹默阿彌（明治二十六年歿）	默阿彌の脚本集。
			新體詩抄	外山丶山等	外山丶山・井上巽軒・矢田部尙今の共著。最初の新體詩集。
			經國美談	矢野龍溪（昭和六年歿）	ギリシヤのテーベの勃興を主とせる小說。
			小說神髓	坪內逍遙（昭和十年歿）	小說に關する考察を組織的に纏めしもの。
			當世書生氣質	同　人	東京に於ける學生生活を描けるもの。
			桐一葉	同　人	豐臣氏の滅亡を背景に片桐且元を主人公とせる新史劇。
			雪中梅	末廣鐵腸（明治三十九年歿）	國野某といふ青年政治家を主人公とせる小說。
			花間鶯	同　人	國野の政治的活躍を主とせる小說。
			佳人の奇遇	東海散士（大正十一年歿）	會津亡命の士が世界を周遊して慷慨するもの。

書名	人名	概説
浮雲	長谷川二葉亭（明治四十年歿）	内海文三を主人公とせる小説。
其の面影	同　人	小野哲也を主人公とせる小説。
平凡	同　人	自敍傳的小説。
孝女白菊の歌	落合直文（明治三十六年歿）	井上巽軒の漢詩を譯せるもの。
萩之家歌集	同　人	歌集。
いさりび	大和田建樹（明治四十三年歿）	詩集。
雪月花	同　人	韻文・散文集。
夏木立	山田美妙（明治四十三年歿）	短篇集。
大正の青年と帝國の前途	德富蘇峰	青年に與へし訓話。
近世日本國民史	同　人	安土・桃山時代以後の日本國民史。
世の中	三宅雪嶺	著者の處世觀を述べしもの。
想痕	同　人	感想文集。
風流佛	幸田露伴	珠運を主人公とせる小説。
五重塔	同　人	藝術の永遠性を描ける小説。
天うつ波	同　人	水野と稱する小學教師を主人公とせる小説。
伽羅枕	尾崎紅葉（明治三十六年歿）	お仙といふ女性の數奇なる運命を敍す。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概説
			二人女房	尾崎紅葉	士族の娘二人の性格並びに運命の相違を敍す
			金色夜叉	同　人	間貫一を主人公とせる小説。
			掘出し物	饗庭篁村（大正十一年歿）	衰微せし主人が舊居より寶を掘出して再興することを敍す。
			むら竹	同　人	短篇集。
			國民性十論	芳賀矢一（昭和二年歿）	日本國民性の特質を論じたるもの。
			國文學史十講	同　人	國文學史の講話。
			舞姫・うたかたの記・文づかひ	森鷗外（大正十二年歿）	何れも外國婦人を主人公とせる小説。
			即興詩人	同　人	アンデルセンの小説を翻譯せるもの。
			玉篋兩浦島	同　人	對話を主とせる敍事詩劇。
			於母影	鷗外等	鷗外の主宰せるSSS社の譯詩集。
			歌人に與ふるの書	正岡子規（明治三十五年歿）	和歌革新論。
			獺祭書屋俳話	同　人	俳論。
			墨汁一滴・病床六尺	同　人	隨筆。
			蓬萊の曲	北村透谷（明治二十七年歿）	三齣八場の劇詩。
			秋窓雜記	同　人	隨筆。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
			瀧口入道	高山樗牛（明治三五年歿）	小說。
			日蓮論	同　人	著者の日蓮觀。
			濁り江	樋口一葉（明治二九年歿）	小說。
			たけくらべ	同　人	小說。
			夜行巡査	泉鏡花	觀念小說と稱せらるゝもの。
			外科室		
			高野聖	同　人	高野の說敎僧が語る昔の行脚物語。
			ふところ日記	川上眉山（明治四二年歿）	日記。
			詩聖ダンテ	上田柳村（大正五年歿）	ダンテを紹介せるもの。
			みをつくし	同　人	南歐文學を譯せるもの。
			上田敏詩集	同　人	歐洲詩人の詩を譯せる「海潮音」、著者の詩集たる「ちゃるめら」「牧羊神」等を收む。美文集。
			黃菊白菊	大町桂月（大正十四年歿）	
			學生訓	同　人	學生に與へし訓話。
			國文學全史平安朝篇	藤岡作太郎（明治四三年歿）	平安朝時代の國文學史。
			近世繪畫史	同　人	江戸時代の繪畫史。
			東西南北・天地玄黃	與謝野鐵幹（昭和十年歿）	詩集。
			亂れ髮・舞姬・春泥集	與謝野晶子	歌集。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
			春日局	福地櫻痴（明治三九年歿）	春日局を主人公とせる戲曲。
			若菜集・一葉舟・夏草・落梅集	島崎藤村	詩集。
			破戒・嵐・夜明け前	同　人	小說。
			千曲川スケッチ	同　人	隨筆。
			新片町より		
			武藏野	國木田獨步（明治四二年歿）	詩的散文集。
			牛肉と馬鈴薯	同　人	小說。
			天地有情・曉鐘・東海遊子吟	土井晚翠	詩集。
			暮笛集・ゆく春・落葉・白羊宮	薄田泣菫	詩集。
			茶話・草木蟲魚・太陽は草の香がする	同　人	隨筆。
			春夏秋冬	子規等	子規の主宰せる「ホトトギス派」の句集。
			日本詩歌論	野口米次郎	日本詩歌に關する論文。
			二重國籍者の詩	同　人	詩集。
			不如歸・思ひ出の記	德冨蘆花（昭和二年歿）	小說。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概説
			自然と人生・死の蔭に	同 人	隨筆感想集。
			蒲團・生・妻	田山花袋（昭和五年歿）	小説。
			花袋紀行集	同 人	紀行文を集む。
			木像・東京の皮	上司小劍	小説。
			鱸	中村吉藏	小説。
			無花果	同 人	何れも戯曲。
			井伊大老の死		
			大鹽平八郎		
			草わかば・獨絃哀歌・春鳥集・有明集	蒲原有明	何れも詩集。
			ふらんす物語	永井荷風	フランス滯在中の印象記。
			牡丹の客・すみだ川・秋の別れ	同 人	小説。
			吾輩は猫である	夏目漱石（大正五年歿）	飼猫が主人並びにその周圍の人々を觀察して物語る構想の小説。
			倫敦塔	同 人	倫敦塔を訪れし時の回想記。
			草枕	同 人	著者の藝術觀を主人公たる繪師の口をかりて述べたるもの。
			梁川文集	綱島梁川（明治四十年歿）	梁川の文を集めしもの。
			病間錄	同 人	明治三十五年より三十八年に至る宗教評論の雜輯。
			近代文藝の研究	島村抱月（大正七年歿）	文藝評論を集めしもの。
			左千夫全集	伊藤左千夫（大正二年歿）	短歌・長歌・新體詩・寫生文・小説等を收む。
			靜夜・永日・朝くもり	尾上柴舟	歌集。

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概説
			古今と新古今	尾上柴舟	古今集と新古今集に關する研究。
			俳諧師	高濱虛子	小説。この外俳句に關する著多し。
			かれくさ都會と田園	野口雨情	詩集。
			朝花夜花別後	同 人	民謠集。
			十五夜お月さん	同 人	童謠集。
			聖三稜玻璃・風は草木にさゝやいた	山村暮鳥（大正十三年歿）	詩集。
			白秋詩集	北原白秋	詩集。
			雀の生活・季節の窓	同 人	隨筆集。
			別離	若山牧水（昭和三年歿）	歌集。
			くろ土	相馬御風	詩集。
			御風詩集	同 人	評論。
			大愚良寛・愚庵和尚の一生	土岐善麿	歌集。
			土岐哀果集	前田夕暮	歌集。
			前田夕暮集	同 人	散文集。
			綠草心理朝靑く描く		

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
		大正（二五七二—二五八六）	啄木歌集	石川啄木（明治十五年歿）	歌集。
			土	長塚節（大正四年歿）	田園を背景に一自作農の心理を描く。
			長塚節歌集	同 人	歌集。
			三千里	河東碧梧桐（昭和十二年歿）	俳句行脚をせし時の紀行文。
			井泉俳句集	荻原井泉水	句集。
			層雲句集	同 人	紀行文。
			山水巡禮	谷崎潤一郎	短篇小說集。
			刺青	吉田絃二郎	小說。
			生くる日の限り	川路柳虹	詩集。
			島の秋	窪田空穗	歌集。
			路傍の花	小山内薰（昭和三年歿）	小說。
			空穗歌集	同 人	戲曲。
			大川端	厨川白村（大正十三年歿）	近代歐米文學を十講に分けて說明せるもの。
			第一の世界	武者小路實篤	小說。
			近代文學十講	同 人	戲曲。
			幸運者	志賀直哉	小說。
			その妹	長與善郎	小說。
			和解・夜の光・荒絹・暗夜行路		
			項羽と劉邦		

天皇	御在位年數	年號	書名	人名	概說
			切火・氷魚・太虛集	島木赤彥（大正十五年歿）	歌集。
			赤彥童謠集	同 人	童謠を集む。
			短歌小見	同 人	歌論。
			赤光・朝の螢	齋藤茂吉	歌集。
			童馬漫語	同 人	歌論集。
			短歌私鈔		
			瓊音句集	沼波瓊音（昭和二年歿）	句集。
			白き手の獵人	三木露風	詩集。
			幻の田園		
			三太郎の日記	阿部次郎	主人公青田三太郎が刻々の內省を語る構想の隨筆評論集。
			北郊雜記	同 人	隨筆。
			菊池寬全集	菊池寬	小說・戲曲・評論を收む。
			善心惡心	里見弴	小說。
			羅生門・春服・黃雀風・夜來の花	芥川龍之介（昭和二年歿）	何れも短篇集。
			海やまのあひだ		
			春のことぶれ	釋迢空	歌集。

今上（二五八六―　）昭和

抒情詩集 田舍の花	室生犀星	詩集。
自分は見た・虹・野天の花	千家元麿	詩集。
柳澤健詩集	柳澤健	詩集。
偶像再興 日本精神史研究	和辻哲郎	研究隨感集。
レ・ミゼラブル 明暗の花 野ざらし	豐島與志雄	ユーゴーの小說の翻譯。小說。
出家とその弟子	倉田百三	戲曲。
俊寛		
空と樹木 高層雲の下	尾崎喜八	詩集。
月下の一群	堀口大學	譯詩集。
砂金 西條八十詩集	西條八十	詩集。
西條八十童謠集	同人	童謠集。
日輪	横光利一	小說。
あの道この道	十一谷義三郎（昭和十二年歿）	小說。

昭和十二年六月十五日初版印刷
昭和十二年六月二十日初版發行
昭和十二年十二月廿一日訂正再版印刷
昭和十三年一月六日訂正再版發行
昭和十六年十月廿六日訂正三版印刷
昭和十六年十月三十日訂正三版發行

新制新撰女子國語讀本全八卷
定價　各卷　金六拾錢

編纂者　佐佐木信綱　武田祐吉

發行者　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地　中等學校教科書株式會社　代表者　山本慶治

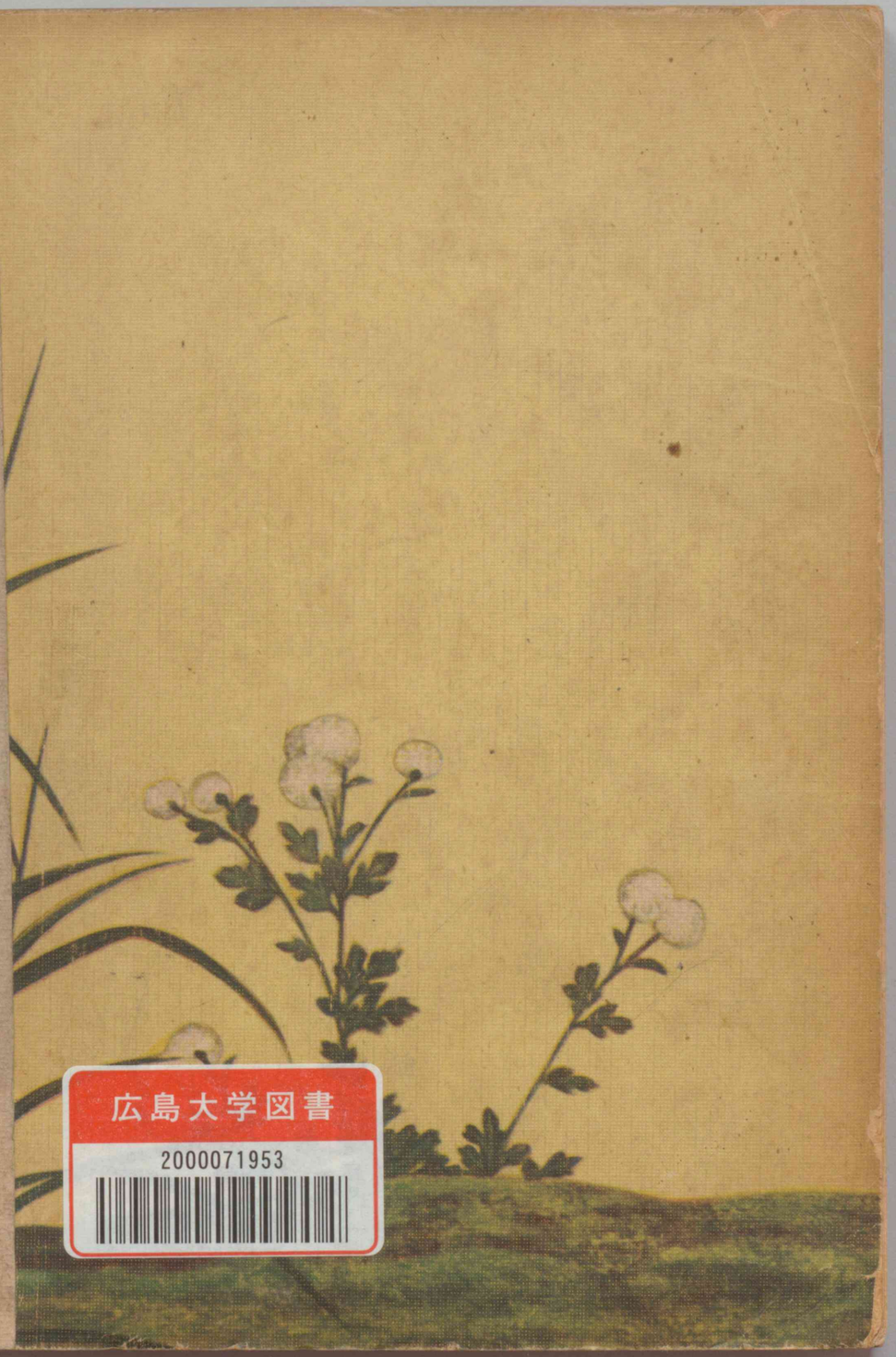
印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　井下書籍印刷所　代表者　井下精一郎（西大三五）

發行所　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地　中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號　一一七五二二

日本出版配給株式會社　元配給
東京市神田區淡路町二ノ九

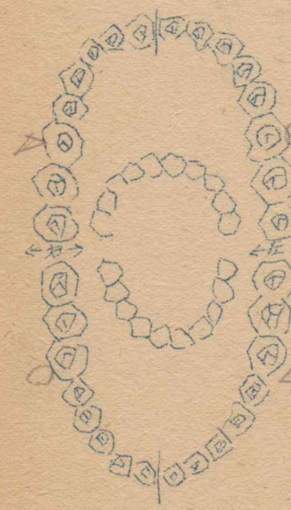
和四學年一組

玉川善子



広島大学図書
2000071953

○――適当歯
△――未〃
×――ソノ他ノ歯疾



三年二組30番 玉川善子